

い　で　の　うえ　むら  
井手ノ上村遺跡

繁殖農場新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

宮崎県児湯郡川南町教育委員会

## 序 文

本書は、宮崎県児湯郡川南町大字平田字井手ノ上で有限会社協同ファームによる繁殖農場新築工事に伴い、平成29年度に発掘調査を行った井手ノ上村遺跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では、主に縄文時代早期と弥生時代中期の遺構・遺物が出土・検出されました。これらの資料は、本町の歴史を探る上で非常に重要な手がかりになると考えております。

また、本町には、日本の旧石器時代研究に多大な足跡を残す後牟田遺跡や国史跡である川南古墳群をはじめ、旧石器時代～中世に至るまで多くの遺跡が点在しております、その保護と顕彰に努めているところであります。こうした本町の歴史的な環境の中で、今回の調査の成果をまとめた本書が単なる学術資料としてだけでなく、それらを地域に還元することで学校教育や社会教育の場においても活用され、文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、惜しむことなく御配慮、御援助を寄せていただいた有限会社協同ファームの関係各位及び地元の方々に深謝するとともに、発掘調査の実施並びに報告書作成にあたって御指導、御協力いただきました宮崎県埋蔵文化財センター、宮崎県文化財課に対し、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

川南町教育委員会

教育長 木村 誠

## 例　　言

- 1 本書は、繁殖農場新築工事に伴い川南町教育委員会が実施した、児湯郡川南町大字平田字井手ノ上に所在する井手ノ上村遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、有限会社協同ファームの依頼を受け、川南町教育委員会が主体となって実施し、平成29年7月12日から11月30日まで実施した。
- 3 発掘調査は、教育課文化スポーツ係長 中村正樹及び同係主任主事 林田勝恵が中心になって行った。また、現地調査における図面作成及び写真撮影については、調査担当者及び同係職員で行ったほか、宮崎県埋蔵文化財センター職員の協力を得た。
- 4 整理作業は、川南町教育委員会において平成30年8月1日から11月30日まで行った。本書に係わる業務については、教育課文化スポーツ係主任技師 德田敬太が整理作業員及び宮崎県埋蔵文化財センター職員の協力を得て行った。
- 5 現地における空中写真撮影は、原作者である有限会社協同ファームの協力を得て実施した。
- 6 本書に掲載した一部の石器実測業務については、有限会社ジバング・サーベイに委託した。
- 7 本書で使用した方位は全て磁北で、レベル高については調査地点付近の仮杭を±0値として換算した数値を示している。なお、調査地点付近の標高は海拔約53mである。
- 8 本書で使用した地図は、川南町発行の5万分の1町全図及び遺跡分布図、有限会社協同ファーム提供の工事図面をもとに作成した。
- 9 本書中の土色の表記及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀夫編・著『新版標準土色帖』に掲った。
- 10 本書における遺構名の表記は、集石遺構をSI、炉穴をSP、堅穴建物をSA、土坑をSC、溝をSE、土器集中部をSZで示し、遺構番号については、整数の通し番号を付した。
- 11 本書の執筆は、徳田及び宮崎県埋蔵文化財センターの吉本正典、二宮満夫、徳原宏樹が分担し、最終的な編集を徳田が行った。なお、細かな文責は文末に記載している。
- 12 発掘調査及び報告書作成に係る全ての経費は、原作者である有限会社協同ファームの負担である。
- 13 発掘調査で出土した遺物、その他の諸記録は、川南町教育委員会で保管している。

## 本文目次

### 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯 ..... 1

第2節 調査組織 ..... 1

### 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置 ..... 2

第2節 歴史的環境 ..... 2

### 第Ⅲ章 調査の記録

第1節 調査方針と経過 ..... 4

第2節 基本層序 ..... 4

第3節 後期旧石器時代の遺物 ..... 7

第4節 繩文時代早期の遺構と遺物 ..... 8

第5節 弥生時代中期～後期の遺構と遺物 ..... 19

### 第Ⅳ章 まとめ

第1節 後期旧石器時代の様相 ..... 26

第2節 繩文時代の様相 ..... 26

第3節 弥生時代の様相 ..... 26

## 挿図目次

第1図 川南町域と井手ノ上村遺跡ほかの位置図 ..... 3

第2図 井手ノ上村遺跡の位置と周辺の主要遺跡 ..... 3

第3図 農場新設予定地と調査区配置図 ..... 4

第4図 A区の遺構分布図 ..... 5

第5図 B区の遺構分布図 ..... 6

第6図 C区の遺構分布図 ..... 7

第7図 後期旧石器時代の遺物 ..... 7

第8図 A区14号集石遺構の平面・断面図 ..... 8

第9図 A区検出集石遺構の平面・断面図 ..... 9

第10図 A区1号炉穴の平面・断面図 ..... 10

第11図 A区1号土坑の平面・断面図 ..... 11

第12図 A区出土の縄文土器① ..... 12

第13図 A区出土の縄文土器② ..... 13

第14図 A区出土の縄文土器③ ..... 14

第15図 A・B区出土の縄文土器① ..... 15

第16図 A・B区出土の縄文土器② ..... 16

第17図 A・B区出土の縄文土器③ ..... 17

第18図 第IV層出土の縄文時代石器類① ..... 17

第19図 第IV層出土の縄文時代石器類② ..... 18

第20図 1号竪穴建物の平面・断面図及び  
出土遺物 ..... 20

第21図 2号竪穴建物の平面・断面図及び  
出土遺物 ..... 20

第22図 3号竪穴建物の平面・断面図及び  
出土遺物 ..... 22

第23図 2号土坑の出土遺物 ..... 23

第24図 1号溝状遺構の出土遺物 ..... 23

第25図 1号遺物集中部の平面・断面図及び  
出土遺物 ..... 24

第26図 A区出土の弥生土器及び石器類 ..... 25

第27図 B区出土の弥生土器 ..... 25

## 表 目 次

第1表 A区検出の集石遺構計測値	8
第2表 井手ノ上村遺跡出土の石器類計測表	27
第3表 井手ノ上村遺跡出土の土器類計測表①	27
第4表 井手ノ上村遺跡出土の土器類計測表②	28
第5表 井手ノ上村遺跡出土の土器類計測表③	29

## 図 版 目 次

図版 1	調査地点から日向灘を望む（西から）	図版 3	後期旧石器時代の石器類
A区東半部	縄文時代早期の散疊検出状況（南から）	A区出土	縄文時代早期の土器①
B区南半部	縄文時代早期の遺構検出状況（北から）	A区出土	縄文時代早期の土器②
C区中央部	縄文時代早期の遺構検出状況（東から）	A区出土	縄文時代早期の土器③
A区	10号集石遺構検出状況（北から）	A・B区出土	縄文時代早期の土器④
図版 2	A区 17号集石遺構検出状況（北から）	A・B区出土	縄文時代早期の土器⑤
B区	11号（右）・12号（左）集石遺構検出状況（北西から）	縄文時代早期の石器①	
A区	1号炉穴検出状況（西から）	縄文時代早期の石器②	
A区	1号堅穴建物検出状況（南から）	図版 4	
A区	3号堅穴建物検出状況（南から）	SA1（左上）・SA3（右上）・SE1（下段）出土の弥生土器	
A区	3号堅穴建物遺物検出状況（南東から）	SA3出土の弥生土器及び石器	
B区	2号土坑検出状況（北から）	SC2出土の弥生土器	
B区	1号溝状遺構検出状況（北西から）	SZ1出土の弥生土器	
		A区・B区出土	弥生土器
		A区出土	弥生時代の石器

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

原因者である有限会社協同ファームによる畜舎建設が計画された当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「井手ノ上村遺跡」に該当する。

のことから、平成29年4月21日に文化財保護法第93条第1項届出が提出され、工事計画の概要が示された。近隣の調査状況から、確認調査の必要があると判断し、原因者との協議を経て平成29年6月2日から確認調査を実施した。調査の結果、縄文時代早期の遺構と遺物が多数検出され、工事計画の概要と確認調査の結果からも、遺跡に及ぼす影響は非常に大きいことが予想された。遺跡保存のための工事計画変更は難しいとのことから、記録保存を目的とした発掘調査の必要があることを説明し、その後、発掘調査実施について原因者との間で合意に至った。

平成29年7月12日付けで、原因者と発掘調査・整理業務委託の契約を締結し、同日から現地調査を開始した。全体の調査面積は約1,070m<sup>2</sup>である。なお、川南町教育委員会では、当初、単独での発掘調査の実施を模索してB・C区の調査を実施したが、遺跡の重要性が明らかになるにつれて、単独での発掘調査は難しいと判断し、A区の調査途中から宮崎県教育庁文化財課及び宮崎県埋蔵文化財センターの指導の下、発掘調査を実施した。

## 第2節 調査組織

本調査及び報告書作成は、川南町教育委員会が主体となって行った。調査組織は以下のとおりである。

(発掘調査・平成29年度)

教育長 木村 誠  
教育課長 大塚 祥一  
教育課長補佐 岩切 拓也  
教育課長補佐 稲田 隆志  
文化スポーツ係長 中村 正樹(調整・調査担当)  
主任主事 林田 勝恵(調査担当)

(報告書作成・平成30年度)

教育長 木村 誠  
教育課長 大塚 祥一  
教育課長補佐 渡部 好文  
教育課長補佐 稲田 隆志  
文化スポーツ係長 中村 正樹(調整担当)  
主任技師 徳田 敏太(報告書担当)

調査指導

宮崎県文化財課主査 甲斐 貴充  
宮崎県埋蔵文化財センター  
調査課長 吉本 正典  
副主幹 島木 良浩  
主査 高村 哲  
主査 德原 宏樹  
主査 恵利 武馬  
主査 二宮 満夫

報告書作成指導

宮崎県埋蔵文化財センター  
調査課長 吉本 正典  
副主幹 日高 広人  
主査 德原 宏樹  
主査 二宮 満夫

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置

川南町は、宮崎県の中央部に位置している。東は日向灘に臨み、西は上面木山の後線によって木城町、南は高鍋町、北は名貫川を境にして都農町と接している。地勢を概観すると、川南町の大部分は洪積層台地で、西部に位置する上面木山の麓から東部に低く50mないし80mの緩やかに傾斜した波状の高台となっている。町の中央を平田川が流れ、垂門付近で中須川が合流し日向灘に注いでいる。平田川の浸食作用により唐瀬原・国光原の二つの台地に分かれ、平田川と中須川の中間に野田原台地ができている。

井手ノ上村遺跡は、川南町役場が所在する川南町の中心地から約1km南東の川南町大字平田字井手ノ上に所在し、平田川と周辺に広がる沖積低地を見下ろす野田原台地の北端に派生した舌状の台地上に立地する。遺跡は縄文時代から弥生時代にかけての散布地として知られていたが、あくまでも表面調査でのことであり、本調査を行うのは今回が初めてのことである。ただし、これまで行われた踏査によつて、台地の突端より約200m西の台の根を南北に15m切り通す空堀や土塁、曲輪などの遺構が確認されており、「御山」と通称される中世城館跡の領域を含んでいることが知られている。

### 第2節 歴史的環境

井手ノ上村遺跡の周辺においては、全ての遺跡が網羅的に発掘調査されたわけではないものの、旧石器時代から古墳時代までの各時代における遺跡が報告されている。

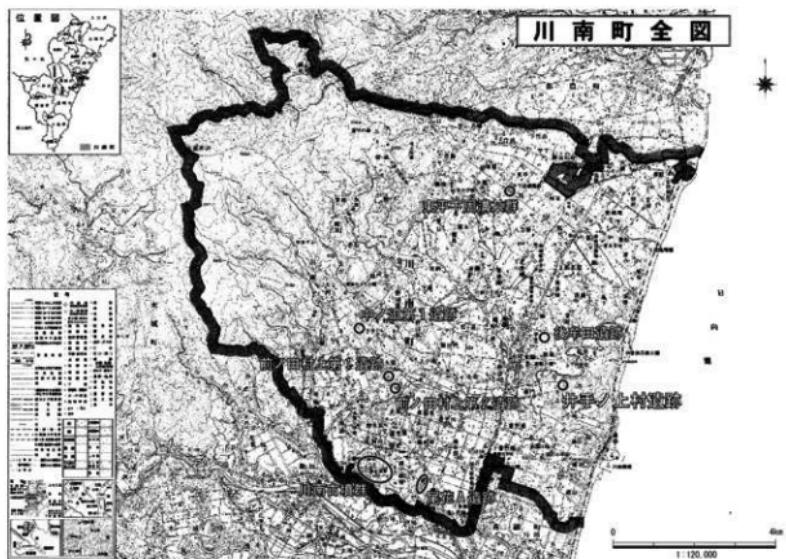
旧石器時代における周辺遺跡としては、川南町東部の見晴らしの良い河岸段丘の縁辺に位置する卒手遺跡・大久保遺跡及び後牟田遺跡などが報告されており、卒手遺跡においては尖頭器が、大久保遺跡では細石核、ナイフ形石器などが出土している。そして、平成5~12年にかけて学術調査を含めた6次にわたる調査が行われた後牟田遺跡では、AT下位の資料を中心に6期の文化層が設定され、南九州における旧石器時代の生活を明らかにする大きな手掛かりとして注目された。また、近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査（東九州調査）において、AT下位では礫群とともに豊富な石器群が出土した中ノ迫第1遺跡やAT上位では剥片尖頭器や細石刃などのまとまった資料を提示した前ノ田村上第2遺跡など、調査事例が増加している。

縄文時代においては、東九州調査の事例とも相まって、山麓近くの丘陵上で遺跡数が飛躍的に増加する。当該遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、早期の山形押型文土器が出土した大久保遺跡や野稻尾遺跡が挙げられる。海浜部に近い台地上でも集落が展開されていたと考えられる。

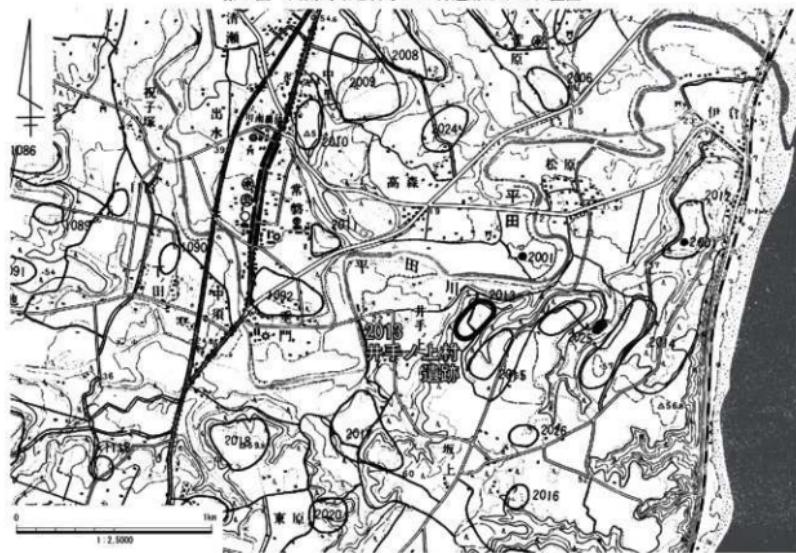
弥生時代では、近隣では本格的な調査が行われた遺跡はないが、中期の鋤先口縁の甕が出土した崩牟田遺跡などが挙げられる。東九州調査の事例からは、後の川南古墳群の成立とも関わりも深い拠点集落として成熟する尾花A遺跡の成果が突出する。また、終末期~古墳時代初頭の東平下周溝墓群は、県内における古墳出現前夜の墓制として注目される。

古墳時代では、小丸川を見下ろす標高約60mの台地に位置し、前方後円墳25基、方墳1基、円墳25基で構成された国史跡の川南古墳群が形成される。そのほか、昭和14年に県指定文化財に指定された川南村古墳などもあり、当該遺跡の北東には、このうちの一つである年ノ森古墳が築かれる。

中世の遺跡では、東九州調査の前ノ田村上第1遺跡で15世紀代を中心とする方形区画溝を有する建物群が検出されたほか、天正5年の高城川原の戦い（通称耳川の戦い）の松山之陣跡も知られている。（徳田）



第1図 川南町域と井手ノ上村遺跡ほかの位置図



1092 垂門遺跡 2001 川南村古墳 2004 竜手遺跡 2006 前半田遺跡 2009 後半田遺跡 2010 仏坂A遺跡 2011 白坂谷遺跡 2012 大久保遺跡  
2013 井手ノ上村遺跡 2014 大半田遺跡 2015 伊谷ヶ谷道路 2016 牧ノ内遺跡 2017 猫ヶ谷遺跡 2025 古場A遺跡 2026 古場B遺跡

第2図 井手ノ上村遺跡の位置と周辺の主要遺跡

## 第Ⅲ章 調査の記録

### 第1節 調査の方法と経過（第3図）

畜舎等の施設新設工事に関わる調査地点は3か所にわたり、北からA・B・C区と呼称した。また、図面作成や遺物の取り上げなどの記録作業に供するために、任意の10m四方の地区割をもって調査区域全てを包括するようして設定した。地区名は南からA1・A2・・・のように、西から1・2・・・のように付して、組み合わせて示した。

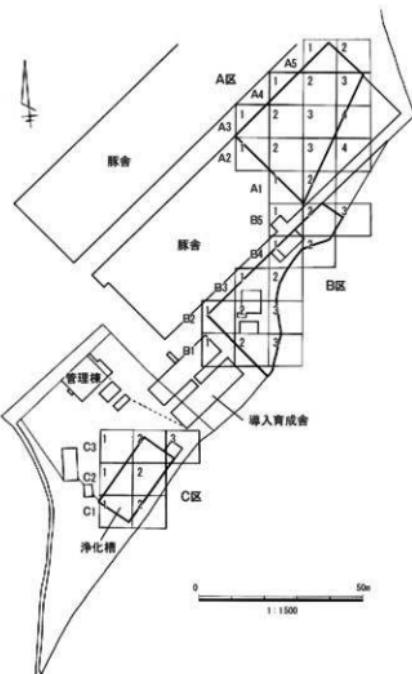
調査地点の大部分については、従前からの造成工事によって縄文時代早期の包含層である第Ⅳ層が全面的に露出していたことから、平面的な発掘調査は南側のC区から包含層の人力掘削を開始した。ところが、縄文時代早期の遺物に混じって、弥生時代中期の土器片が所々で出土し始めたことから、確認調査では検出できなかった弥生時代の遺構が存在していることが判明した。遺構の検出については、第Ⅳ層を除去した第V層上面で実施した。

### 第2節 基本層序（第4・5図）

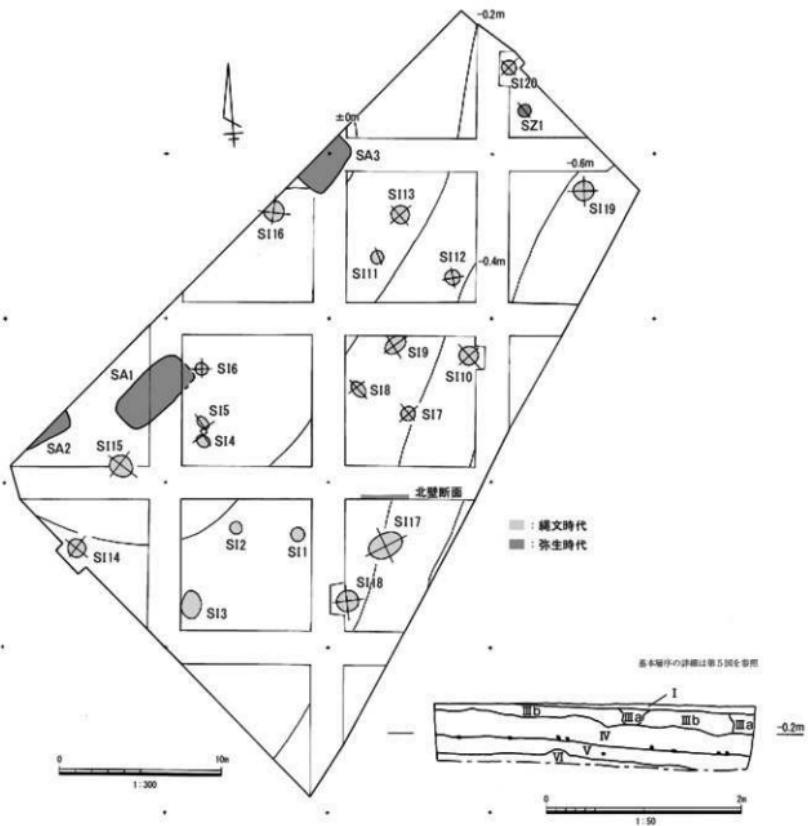
井手ノ上村遺跡は、平田川と眼下の低地を見下ろす断崖の台地の北端に派生した舌状の台地上に立地し、今回の調査地点は台地の北東端に位置する。調査対象地の現況は、平坦地として造成がなされたのち、農地として利用されていたことから、薄い表土（耕作土）下には遺物包含層である第Ⅳ層がすぐに露出する状況であった。ただし、B区の東側については、造成の深度が浅かったためか、本来の基本層が残っていたことから、地層堆積状況の観察と記録をA2-3区北壁面とB区東側壁面の北側で行い、全体を大別してI～VI層に区分した。

第I層は黒褐色粘質土主体の表土で、層厚は最大で0.6mである。このうち近年の耕作土として利用された上位層をIa層とした。

第II層は層厚0.2m未満の黒褐色粘質土で、アカホヤ火山灰ブロックを包含させる。弥生時代中期～後期の遺物包含層と考えられ、検出遺構の最終的な埋土となることもある。



第3図 農場新設予定地と調査区配置図



第4図 A区の遺構分布図

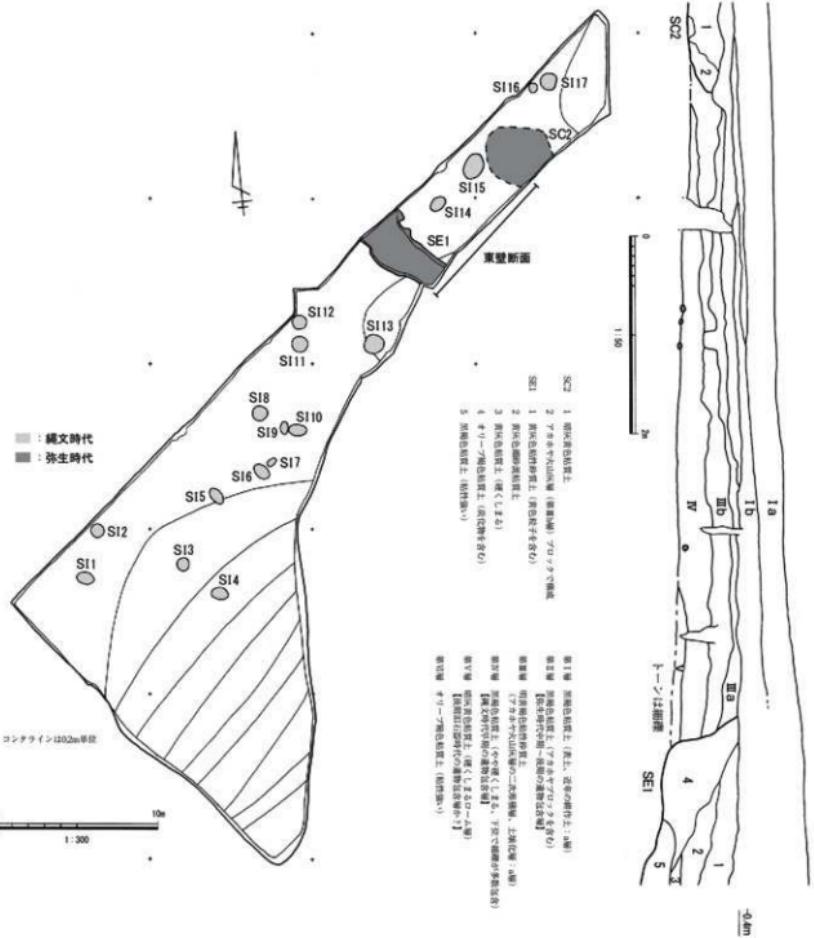
第Ⅲ層はアカホヤ火山灰層の二次堆積層で、層厚0.3m程度の明黄褐色粘性砂質土である。土壤化が進んでいる上位層をa層とし、この上面が弥生時代中期の生活面となると考えられる。

第Ⅳ層はやや硬くしまる黒褐色粘質土で、下位になるにつれ拳大以下の礫が多数含まれる。層厚は0.3～0.4mである。縄文時代早期の遺物包含層で、下面を同時代の生活面とした。

第V層は層厚0.2m程度の暗黃色粘質土で、硬くしまるローム層である。当該層から明確に出土した遺物はないが、第Ⅳ層と第V層の区別なく一つの包含層として掘削した中に、後期旧石器時代の遺物が含まれていたことから、当該層は同時代の遺物包含層であった可能性がある。

第VI層はオリーブ褐色粘質土で、粘性が強い。層厚は0.1m以上である。

(二宮)



第5図 B区の遺構分布図

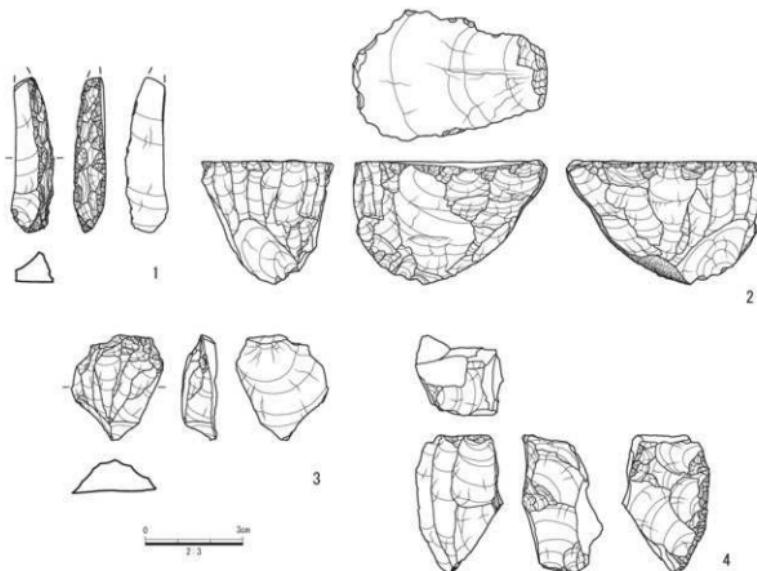
### 第3節 後期旧石器時代の遺物（第7図）

調査では、第IV層中の縄文時代早期に帰属する集石遺構や大量の散疊が広範囲に広がっており、記録のためにそれらを残しつつ掘削を進めた。このため第IV層と第V層との違いを認識せずに掘削を進めることとなり、層位を意識した面的な調査はできていない。結果、大量の散疊の一部は後期旧石器時代の疊群の可能性も否定できず、また上記の状況で調査を進めたため、層的な情報が不足している状態での遺物を抽出することとなった。ただし、遺物の出土点の傾向としては、B区にやや偏りがある。形態的に旧石器時代の遺物と考えられるものについてのみ本節に掲載することとし、それらの詳細については観察表にまとめた。

（徳原）



第6図 C区の造構分布図



第7図 後期旧石器時代の遺物

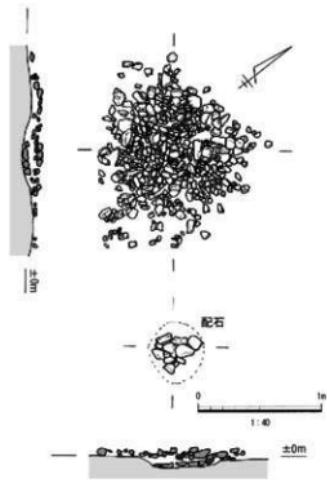
## 第4節 繩文時代早期の遺構と遺物

### 1 遺構の分布（第4～6図）

調査地点は台地先端に派生した舌状地形の北東端に位置している。縄文時代早期の旧地形については、平坦地となるA区最北西部付近を頂点に南東側へと徐々に傾斜し、東側にはすぐに谷地形が迫る。当該時期の生活面は、遺物包含層である第IV層を除去した後に検出することができるが、遺構は同層中に大量に含まれた疊群下において、密集する集石遺構を調査地点の中央から北側にあたるA区及びB区を中心に検出した。また、A区北西側では炉穴1基、土坑1基も確認している。

### 2 集石遺構（S I）（第8・9図）

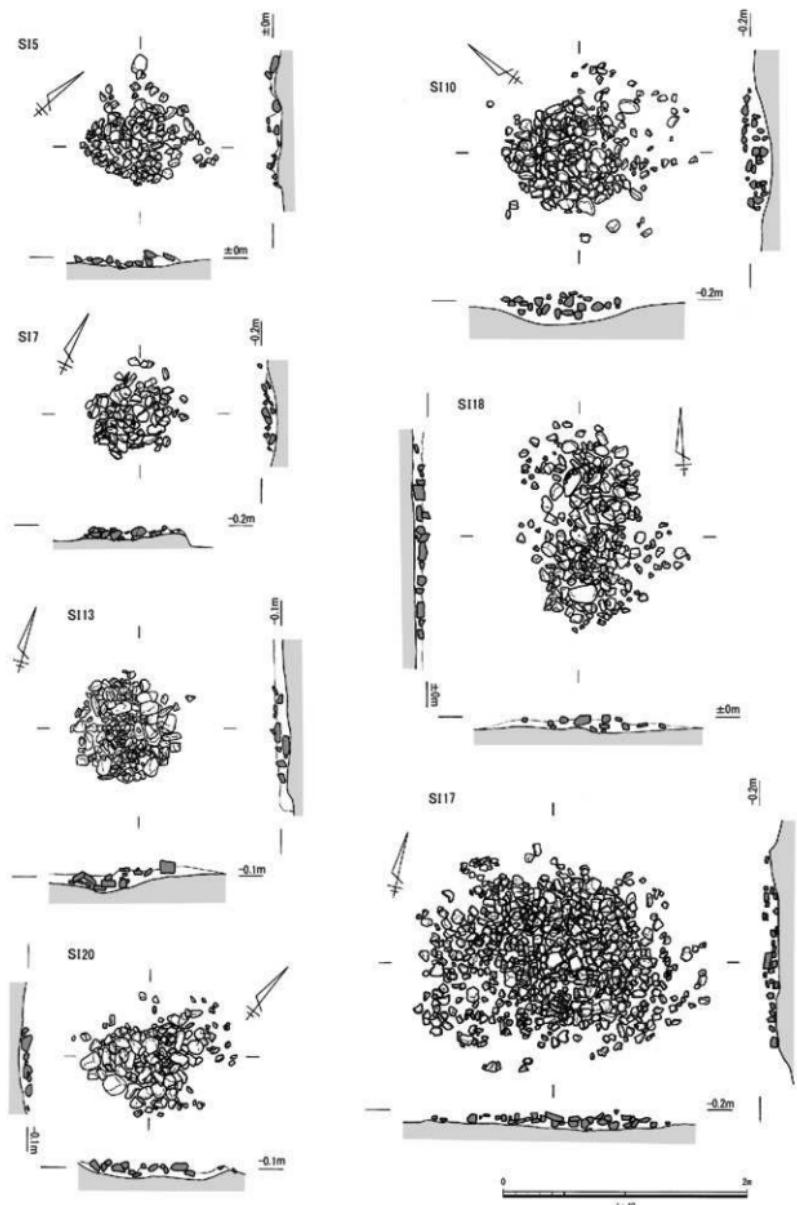
集石遺構は、A区で20基、B区で17基、C区で1基を、第IV層中に大量に含まれた疊群を除去した後に検出した。集石遺構は、いずれの地区でも比較的傾斜の緩やかな平坦地に構築しているのが特徴で、B区のうち旧地形の傾斜がきつい南部域での検出はなかった。ここでは、詳細な記録ができたA区を中心に報告する。集石遺構を構成する疊は、拳大程度の円疊を中心に入頭大の円疊も使用する。検出した集石遺構は、深さ0.1m程度の浅い掘り込みを有するもの9基と明瞭な掘り込みを持たないもの11基とに大別できる。疊の範囲としては、基本的には約1.0m前後の規模のものが大半で、A-SII7のような2.0mを超える大型のものもある。このうち、A-SII4だけが中央に設けられた径約0.7m、深さ0.18mの掘り込みの中に、大振りの扁平な疊を敷き詰めて配石としていた。ただし、A-SII3やA-SI20のように大振りの扁平な疊が所々に認められるものもあることから、明瞭な配置ではなかったが配石として利用していた可能性もある。



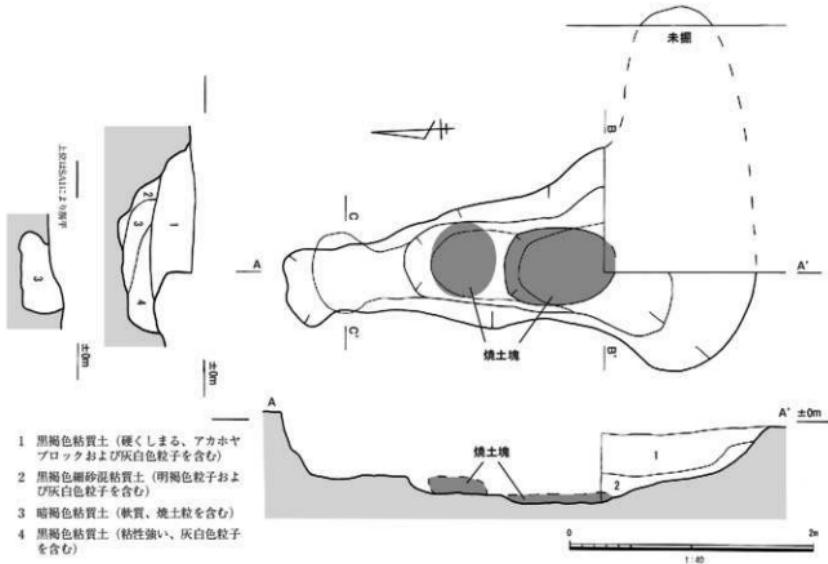
第8図 A区14号集石遺構の平面・断面図

第1表 A区検出の集石遺構計測値

遺構番号	検出位置	疊の範囲 (m)	掘り込みの規模 (m)	出土遺物
SII-1	A2-2	0.9×1.1	—	48
SII-2	A2-2	0.7×0.8	0.6×0.8×0.08	—
SII-3	A2-2	1.0×1.2	—	—
SII-4	A3-2	0.8×0.8	0.7×1.0×0.10	—
SII-5	A3-2	1.0×1.1	—	—
SII-6	A3-2	0.6×0.6	0.5×0.5×0.10	—
SII-7	A3-3	0.7×0.8	0.8×1.0×0.10	93・103
SII-8	A3-3	0.7×1.2	—	95
SII-9	A3-3	1.0×1.0	—	83・92
SII-10	A3-3	1.0×1.3	1.0×1.0×0.15	—
SII-11	A4-2	0.8×0.8	—	—
SII-12	A4-2	0.7×0.9	—	—
SII-13	A4-2	0.9×0.9	0.8×0.9×0.12	—
SII-14	A2-1	1.4×1.6	0.7×0.7×0.18	—
SII-15	A3-1	0.8×1.2	—	111
SII-16	A4-1	1.2×1.4	—	—
SII-17	A2-3	1.7×2.4	—	—
SII-18	A2-3	1.4×1.7	—	—
SII-19	A4-3	1.3×1.6	0.9×1.0×0.12	—
SII-20	A5-2	0.7×1.2	1.0×1.2×0.15	—



第9図 A区検出集石遺構の平面・断面図



第10図 A区1号炉穴の平面・断面図

### 3 炉穴

炉穴については、A区北西部で1基を検出した。ただし、明確に遺構として認識できたわけではないが、第V層上面において、わずかなにじみが確認できた場所も少なくない。調査期日の関係上、全てを確認することは叶わなかったが、後述の1号炉穴以外にも周辺域に炉穴が構築されていたことは十分に予想される。

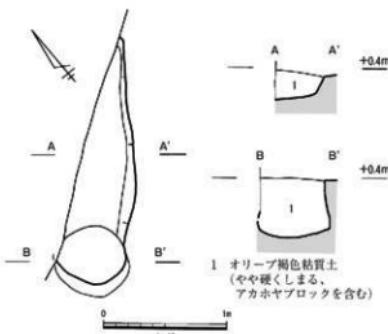
#### 1号炉穴 (S P 1) (第10図)

A3-1区で検出した平面形が「L」字状をなす炉穴である。本来は第V層上面で検出できるが、遺構北半の上位部分はSA1の構築時に失われている。南北長約3.8m、東西長約3.0mの規模を有する「L」字状の平面形のうち、ほぼ南北方向に軸を設ける焚き口と煙道については、北側の煙道に向かって二等辺三角形様に構築する。舟形の断面形状をなす南北軸の中央付近には2段に設けられた窪地があり、最深部となる南側の窪地で約0.6mの深さとなる。また、2段に設けられた窪地には、ともに0.1m程度の厚い焼土の堆積が認められ、北側の上位段から焼土を掘り出した痕跡と考えるのが自然であるが、2基の炉穴が重なり合うのかもしれない。現状では失われているが、ブリッジについては、北端よりやや南側に痕跡が残る。煙道部に関しては、北壁を直立させ、東西壁底を袋状に造る。「L」字状の平面形のうち東西軸については、調査期日の都合上、詳細な調査を行っていないが、作業場として設けられたスペースであったと考える。遺物は埋土中から80・101など早期土器片が数点出土した。

#### 4 土坑

##### 1号土坑（SC1）（第11図）

A4-1区で検出した土坑で、北西側について調査区外に至る。SA3の床面での検出であるが、縦穴建物の床面が第V層上面で抑えられていることから、SC1の上位部はほとんど搅乱を受けていない。検出長で南北2.0m以上、東西0.6m程度の規模を有し、現状では長楕円形の平面形が確認できる。なお、土坑の最南端には、断面形状を袋状にする径約0.6mの円形の深い掘り込みを設けており、検出面からの深さは約0.5mであった。円形部以外は深さ0.2m程度で底面を水平に造る。埋土はオリーブ褐色のやや硬くしまる粘質土で、全体的にアカホヤ・火山灰ブロックを含む。遺物は埋土中から縄文時代早期土器片34が出土した。（二宮）



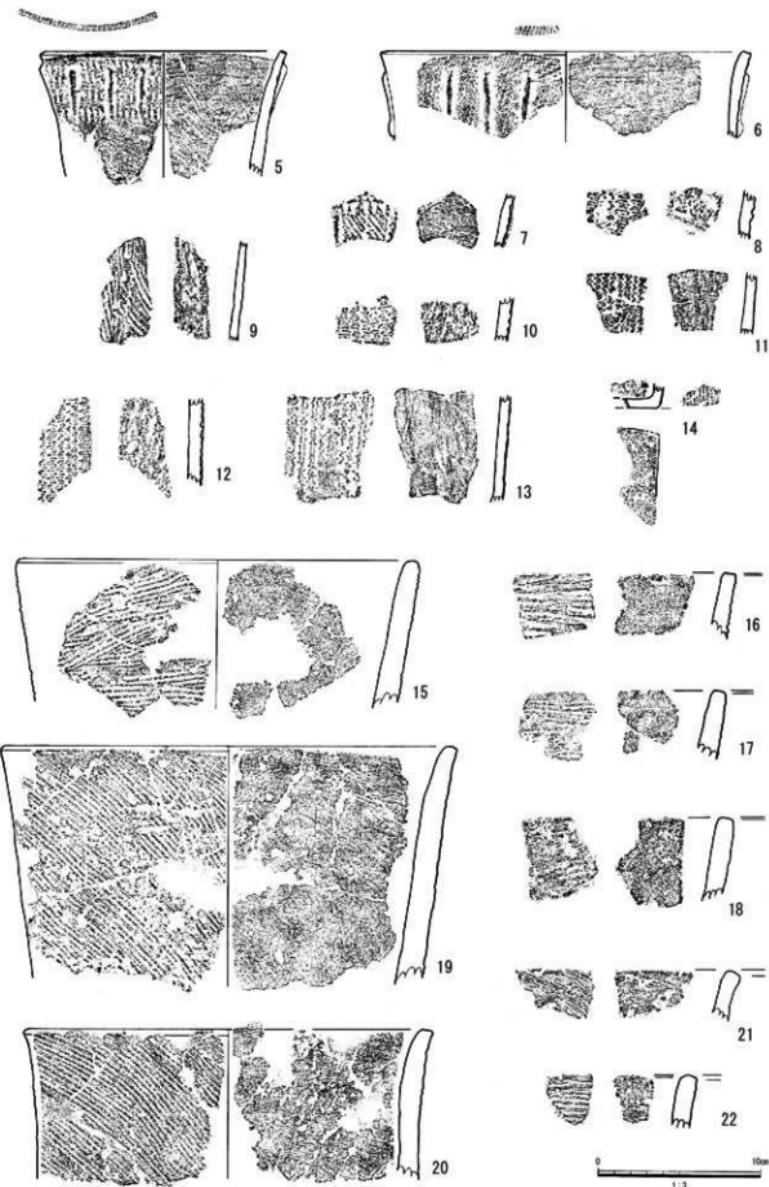
第11図 A区1号土坑の平面・断面図

##### 5 遺構及び第IV層出土の遺物（第12～19図）

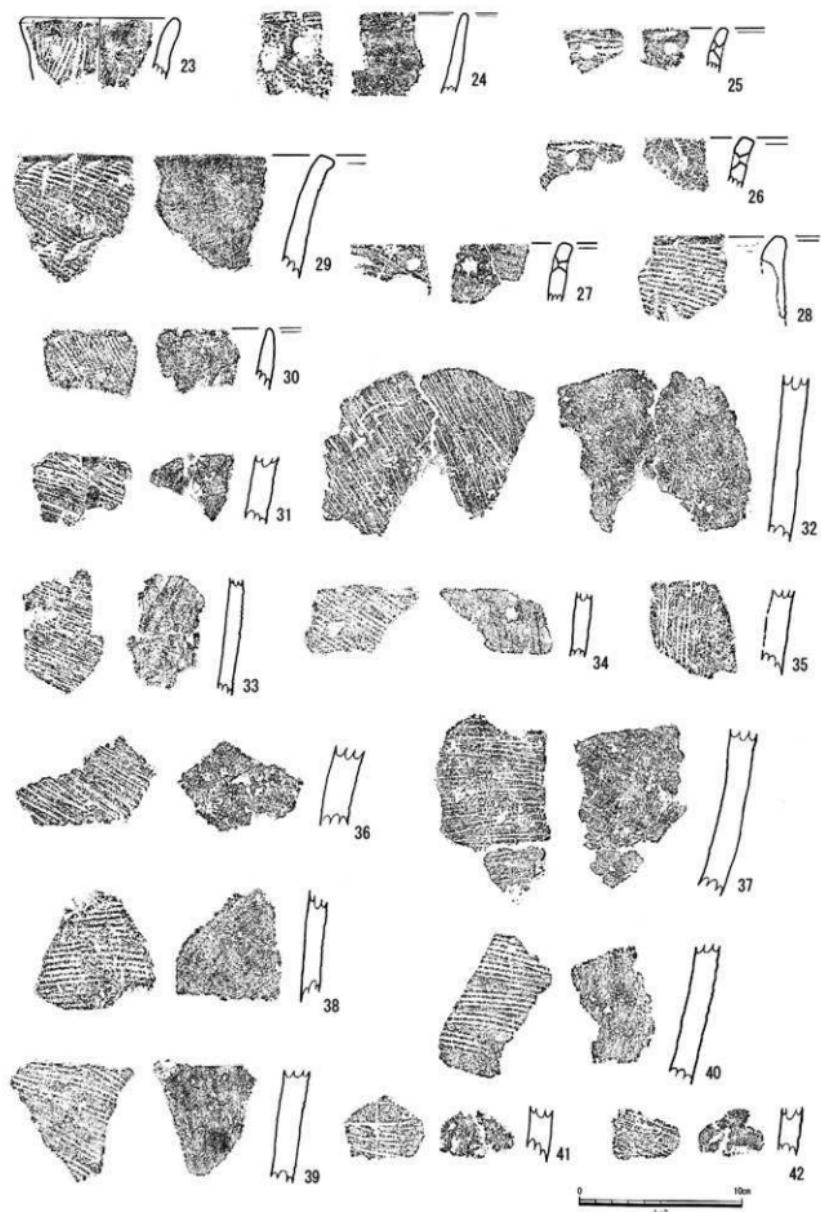
当遺跡で出土した縄文早期土器は、遺物包含層である第IV層の掘削中、及び集石遺構、礫の検出作業中に確認されており、一部、遺構埋土中、あるいは集石遺構の礫に混在する状況で出土したものもある。まとまった破片は少ない。第12図～第17図では基本的にA区とB区に分けて図面を提示したが、顕著な様相の違いは見受けられず、南九州貝殻文円筒形土器に包括されるものが多数を占める。特に、楔形貼付文を施し、貝殻条痕を地文としてその上に貝殻腹縁による縦方向の刺突線文を施す加栗山式（5～14）と、それよりはやや厚手で、外面に貝殻による条痕を斜方向に施す別府原式（15～49）が目立つ。加栗山式に属する口縁部は2点認められ、いずれもわずかに外反する形状を呈する。5は楔形貼付文の間に施された貝殻刺突線文が連点状となり、押引文に似た文様となる。6は口唇部と楔形貼付文との間に斜位の貝殻刺突線文を施している。14は角筒形を呈する底部片で、外面の下部に縦方向の密な平行沈線文がみられる。別府原式に属する土器群は、直線的に開く器形のものと口縁端部が反るものに大別され、口唇部の断面形が角張るものと丸みを帯びるものとに分けられる。また、条痕については凹凸が明瞭なものと目の粗いもの認められる。内面は丁寧な調整によって平滑に仕上げられる。58や59などは同型式に属する底部と考えられる。59～61には底面に圧痕が認められる。107は円盤状の底部であり、胎土中に鉄分を含んだ赤褐色の部分が筋状に混じる。上記のほか、少量ではあるが、貝殻による平行沈線文を施す桑ノ丸式（50・51）、押型文系土器（52～56・62・98・111）などが出土している。57は外面の胴部に横方向に縄文を施すものである。62と111は外面に山形押型文を施す底部片である。いずれもA区出土。111は尖り気味となる個体である。

石器は目立ったものを選別して図化した。第IV層の掘り下げ作業の状況からみて、他時期の資料が混入している可能性は否定できない。

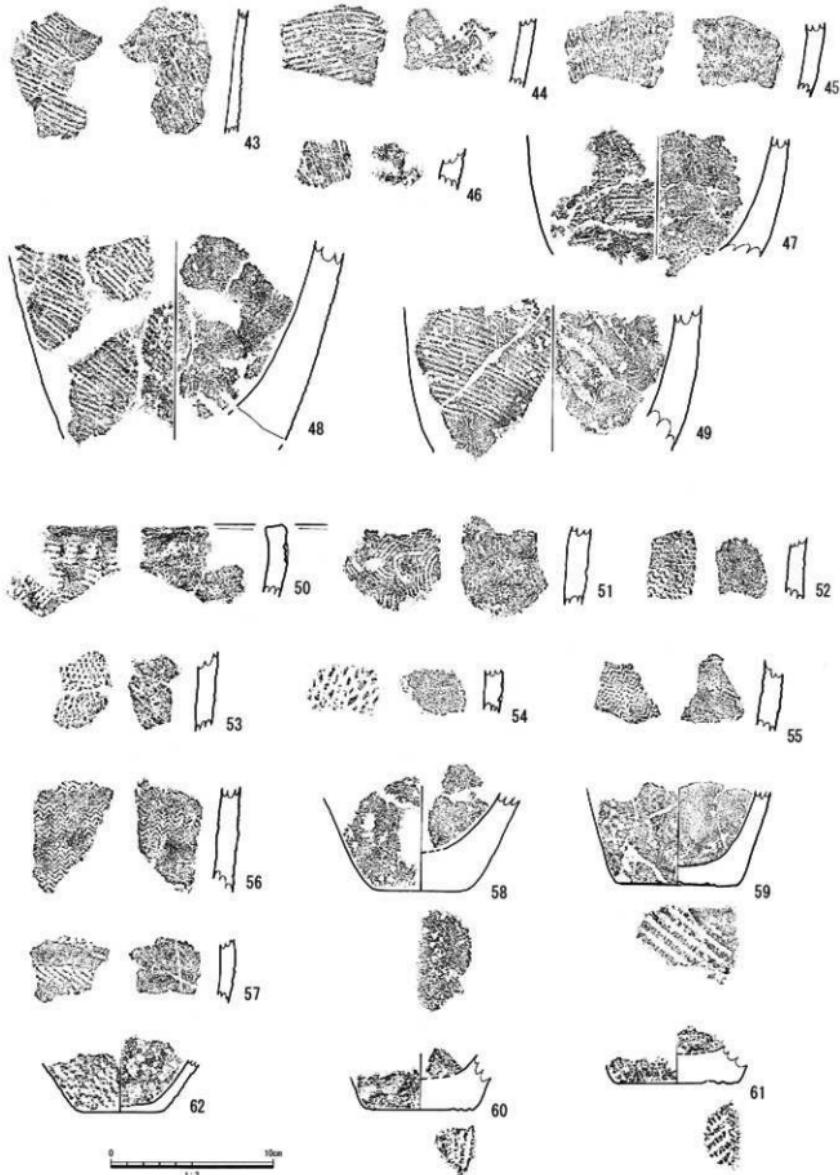
（吉本）



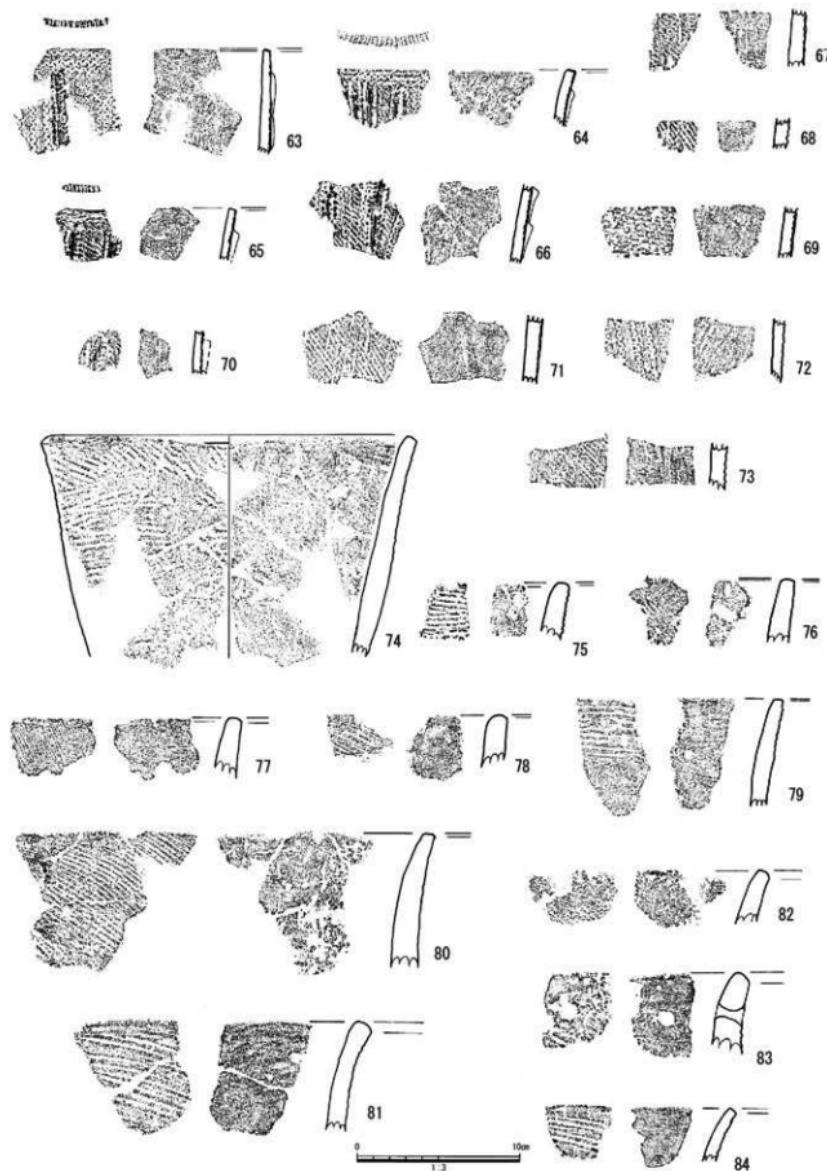
第12図 A区出土の縄文土器①



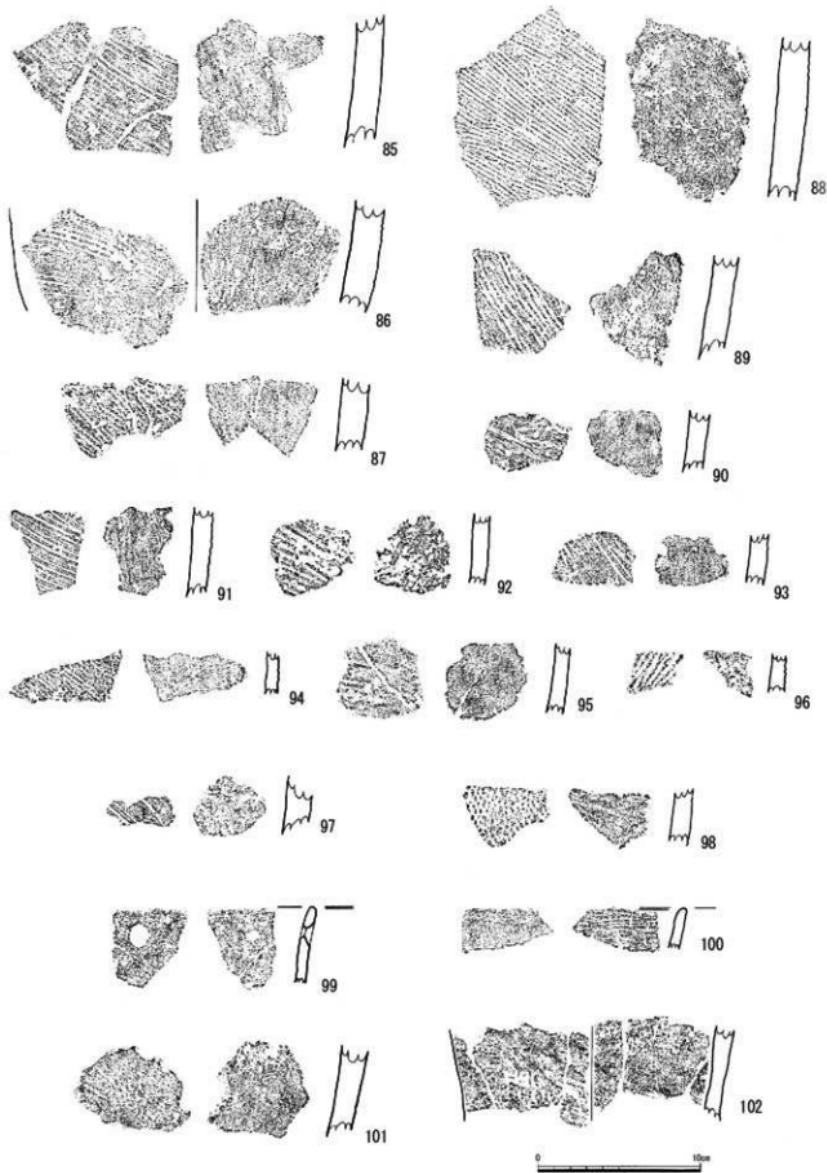
第13図 A区出土の縄文土器②



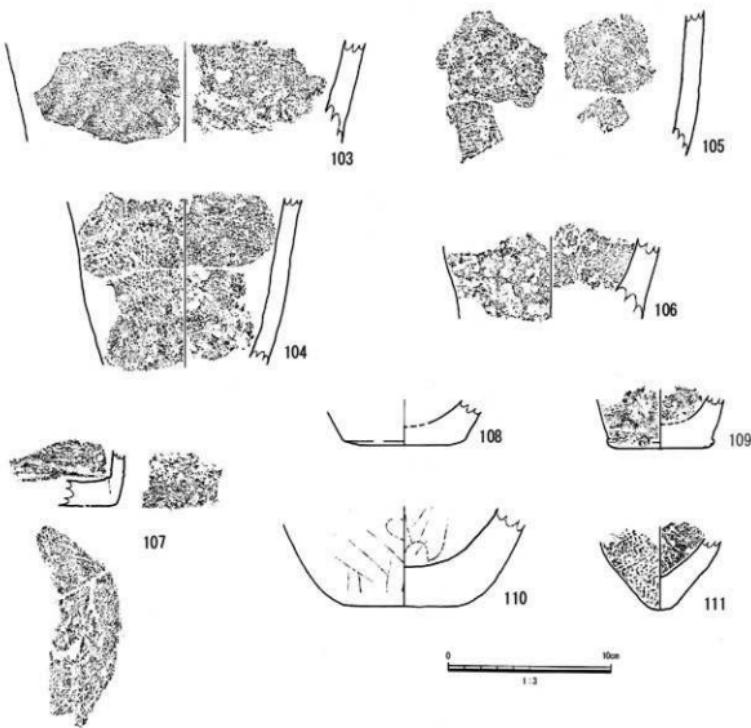
第14図 A区出土の縄文土器③



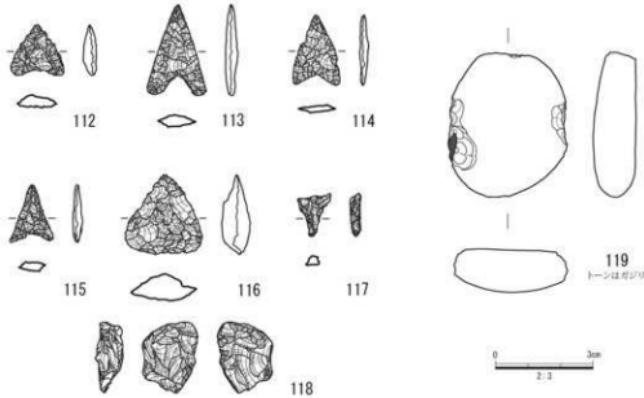
第15図 A・B区出土の縄文土器①



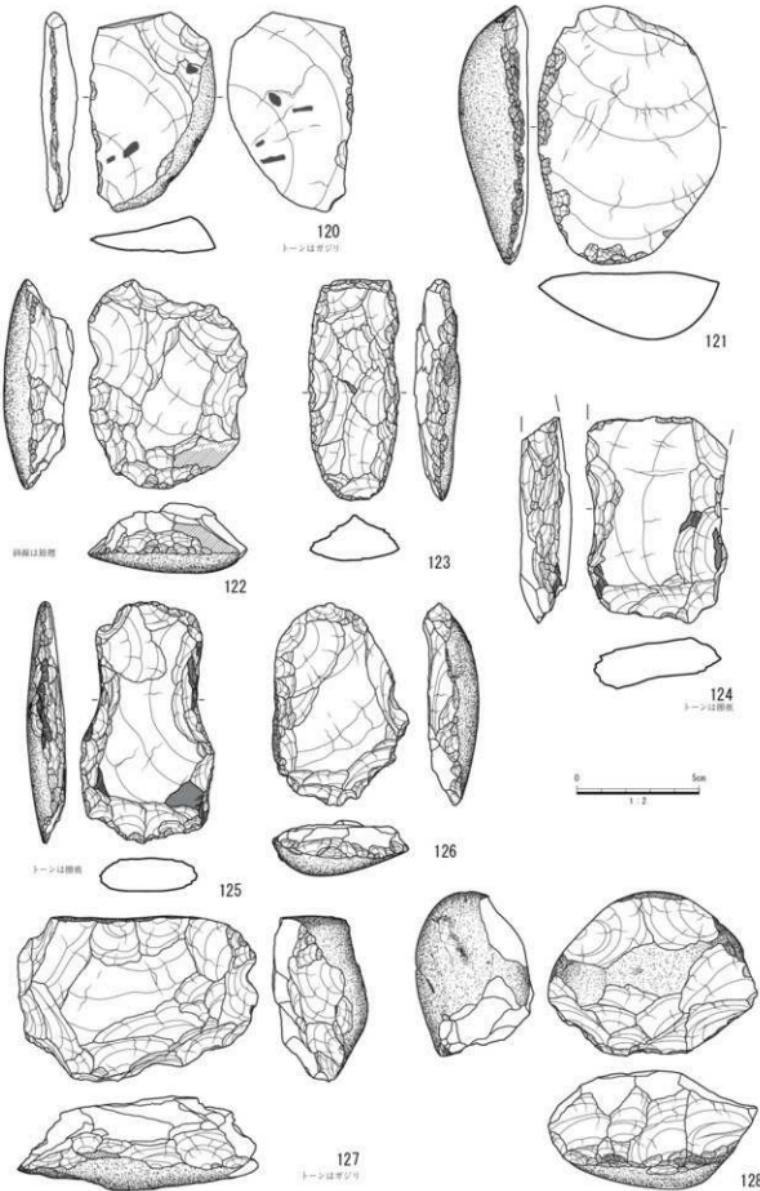
第16図 A・B区出土の縄文土器(2)



第17図 A・B区出土の縄文土器③



第18図 第IV層出土の縄文時代石器類①



第19図 第IV層出土の縄文時代石器類②

## 第5節 弥生時代中期～後期の遺構と遺物

### 1 遺構の分布（第4・5図）

調査地における上位の基本層は、大部分が從前からの造成工事によって失われていたが、弥生時代中期の生活面については、本来ならば遺物包含層と考えられる第II層除去後に検出できる。しかし、調査に関しては、当初、弥生時代の生活面の存在を想定してなかったことから、縄文時代早期の包含層である第IV層の掘削中あるいは除去後に、弥生時代の遺構が確認されることとなった。ただし、一部の遺構については、調査区内に設定した格子状の地層観察用畦の上面で検出している。

当該時期の旧地形は、調査以前の造成によって大部分の情報が失われて判然としないが、A区北西を頂点に南東方向に緩やかに傾斜すると思われ、調査地より東側に向かうと谷地形となる。検出できた遺構は、A区では西側で竪穴建物2棟、北側で竪穴建物1棟と土器集中部1か所を、B区北側で土坑1基と溝状遺構1条を検出した。なお、B区の溝状遺構以南とC区では遺構の検出はない。

### 2 竪穴建物

#### 1号竪穴建物（SA1）（第20図）

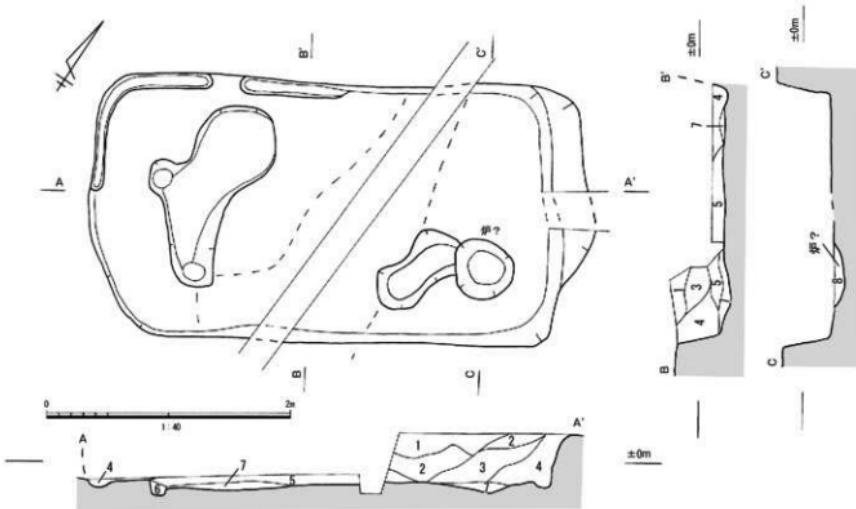
A3-1・2区で検出した方形を基調とする竪穴建物である。第IV層除去後に平面形状を確認したため、建物上位部の大半を失ってしまったが、西側の一部は地層観察用畦上で検出できた。平面規模については、検出面で東西4.0～4.2m、南北約2.1mとなる。床面は平らに整えられており、しまりのない暗褐色粘質土（7層）が薄く堆積していたが、貼床とは積極的には言い難く、建物廃絶後の土壤化層であったと考えておきたい。検出面（畦上）から床面までの深さは約0.4mであった。建物床面上には西側の2か所に小穴を伴う浅い弧状の落ち込みが、東側には直径0.5m程度、深さ約0.1mの円形の土坑が設けられている。そして、東側の土坑にはやや浅めの落ち込みが西側に取り付き、焼けた痕跡はないがともに底面が硬化しており、埋土に焼土粒が認められることから炉であった可能性が高い。なお、主柱穴に関しては積極的に確認できなかったが、先の小穴が利用されたとも考えられる。さらに、壁面に沿って小溝が設けられているが、北西側のみで全周しない。建物の埋土は、暗褐色系の砂質を含む粘質土（4層）が壁際に三角形状に堆積しており、アカホヤ火山灰層（第III層）や第IV層ブロックを多く含むことを考慮すると周堤の流入土である可能性も示唆しておきたい。これより上位に関しては自然堆積による埋没と考えられる。

なお、地層観察用畦上面において、建物南壁肩より南側に、黒色土と第III層が混ざり合った層が薄く堆積していたことから、明確な形状は把握できなかったが本来は南側に棚状の施設を持つ竪穴建物であったと考えられる。

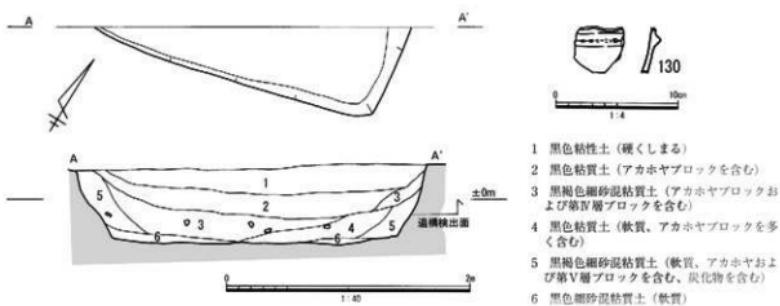
出土遺物は細片が多いため、復元・図化できるものは少なかったが、胴部に3条の突帯をもつ壺129などが出土した。

#### 2号竪穴建物（SA2）（第21図）

A3-1区で検出した方形を基調とする竪穴建物の南東隅にあたる。SA1と同様に第IV層除去後に平面形状を確認したため、建物上位部の大半を失っている。西側は調査区外に至るため、正確な平面形状を知ることはできないが、検出面で東西2.5m以上、南北0.8m以上の規模を有し、調査区断面で確認できた壁肩から床面までの深さは約0.6mとなる。平らに整えられた床面には、SA1と同様に廃絶後の土



第20図 1号竪穴建物の平面・断面図及び出土遺物



第21図 2号竪穴建物の平面・断面図及び出土遺物

壊化層と考えられるしまりのない黒色の砂質粘質土（6層）が薄く堆積している。建物の埋土は、壁際に黒褐色系の砂質粘質土（4・5層）が三角形状に堆積しており、SA1と同様にアカホヤ火山灰層（第Ⅲ層）や第Ⅳ層ブロックを多く含むことから周堤の流入土の可能性もある。なお、5層には炭化物も混在している。これより上位層は自然堆積による埋没であろう。

出土遺物はかなり少なく、刻目突帯をもつ壺130のみが図化できた。

### 3号竪穴建物（S A 3）（第22図）

A4-1・2、A5-1区で検出した方形を基調とする竪穴建物である。地層観察用畦上面の第Ⅳ層中で平面形状を確認した。西側が調査区外に至ることもあり本来の平面形状は不明であるが、検出面で東西2.2m以上、南北約3.5m以上の規模となる。やや歪に掘削された底面には、0.1mの厚みでしまりの強い黒褐色粘質土を敷き詰めて貼床として利用している。建物構築時である底面までの深さは最大で0.35mであった。南北方向の中心付近には、2本で構成される主柱穴の1本が、貼床上面から設けられている。漏斗状に深く掘削された主柱穴は、上端径0.5～0.6m、深さ0.8m程度の規模を有し、断面の形状から0.15m以上の柱が使用されていたと考えられる。貼床以上の埋土は1層のみで砂質土を主体とした自然堆積土であった。

遺物は建物床上面で1個体分の壺134が破碎した状態で出土したほか、敲石137と磨石138も床直上で出土した。その他、中溝式系壺131などの図化できた遺物は埋土中から出土した。

## 3 土坑

### 2号土坑（S C 2）（第23図）

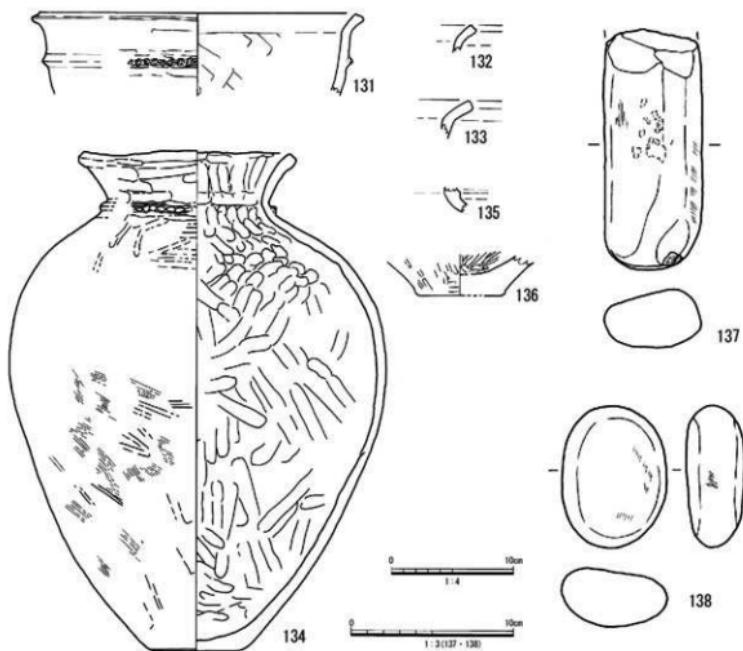
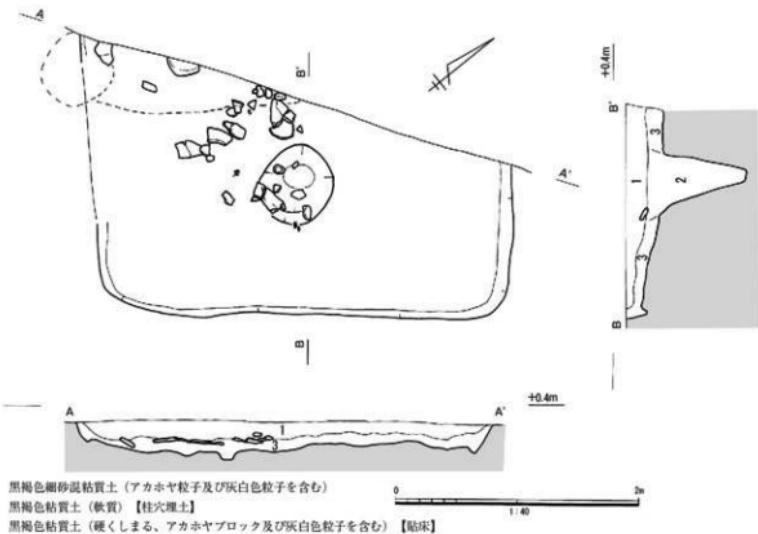
B5-2区で検出した一辺3.5m程度の方形を基調とする大型の土坑で、東側は調査区外に至る。第Ⅳ層掘削中に大きな弥生土器片の集中が認められ、調査時には竪穴建物と認識していた。土坑の規模や形状からその可能性も否定できないが、詳細な調査に至っていないことから、大型の土坑として報告する。土坑の範囲については、調査時に検出面（第V層）で認識できた底面形を示しているが、埋土の状況等は調査区東壁断面で一部であるが確認できた。本来ならば第Ⅱ層除去後に検出できる深さは約0.4mとなり、埋土は南側の2層だけが確認できた。土坑の南壁際は、アカホヤ火山灰層（第Ⅲb層）の崩落によるものかブロックで構成され、埋土の主体は暗灰黄色粘質土の單一層であった。

土坑出土の遺物は破片も大きく量も多いが、詳細な記録がないため出土の状況は定かではない。139は黄色系の色調をもつ山ノ口式系大壺で、140・141は同一個体と考えられる下城式系壺である。142は下城式系の広口壺で、頭部下端を勾玉状の浮文で装飾する。また、胴部にある2条の突帯の上位に焼成後の穿孔が認められる。143は壺の胴部で台形状の突帯をもつ。144～147は壺の底部である。

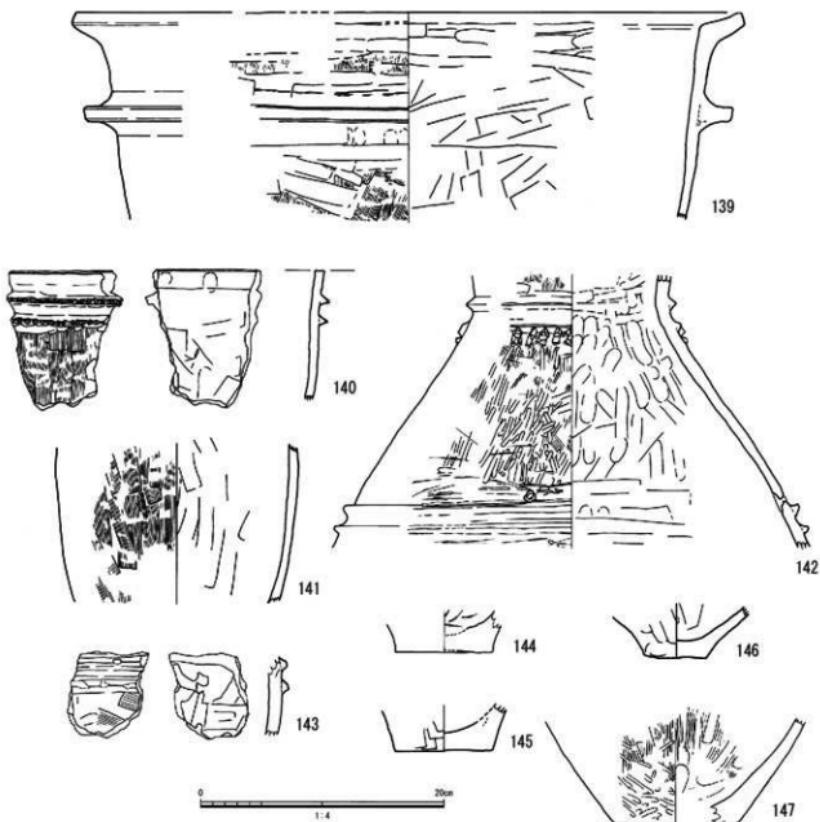
## 4 溝状遺構

### 1号溝状遺構（S E 1）（第24図）

B4-2区で検出した南東方向から北西方向に延びる溝で、両端はともに調査区外に至る。第V層を検出面としたため、詳細な規模は不明であるが、検出長5.0m以上、幅3.0m以上となる。溝の断面形状等については、SC2同様に調査区東壁断面で北側のみ確認できた。第Ⅱ層除去後に検出できる溝の深さは1.0m以上を有し、確認できる範囲では幅の広い逆台形状を呈し、溝底面の中心部が溝状に窪む。埋



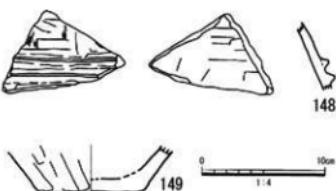
第22図 3号竖穴建物の平面・断面図及び出土遺物



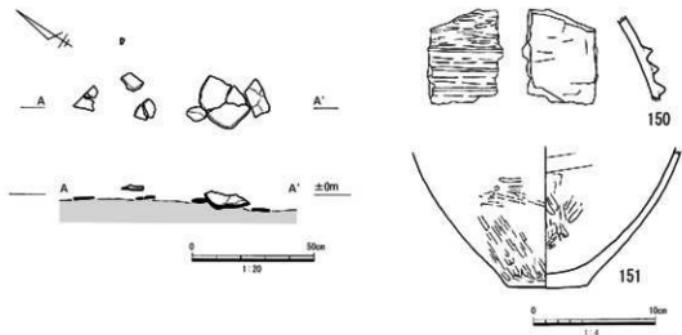
第23図 2号土坑の出土遺物

土は現状で5層が確認でき、最下部には溝の底部に溜まる自然堆積土と考えられる黒褐色粘質土の堆積がある。さらに、溝の北壁際にはオリーブ褐色粘質土が三角形状に堆積しており、堆積状況を鑑みると溝の北側に設けられた土壘の盛土が崩落したものとも考えられる。これより上位については、自然堆積と考えられる第Ⅱ層か第Ⅲ層由来の埋土で埋まる。

南側にやや弧を描く平面形状、深い深度と断面形状、土壘を有していた可能性があるとこを踏まえる



第24図 1号溝状構造の出土遺物



第25図 1号遺物集中部の平面・断面図及び出土遺物

と、SE1が北側に展開する集落を囲む環濠の一部であるとしても差し支えはないと考える。

出土した遺物の状況はSC2同様に定かではないが、検出した平面形がほぼ溝の底面にあたることから、胴部に三角形状の突帯をもつ壺148や壺底部149は、底面に近い位置からの出土と考えられる。なお、SE1の上位部を包含層として掘削していることを踏まえると、第27図で示した遺構に伴わない遺物のうちB4-2区のものは、SE1の埋土中に包含されていた遺物の可能性が高い。

## 5 遺物集中部

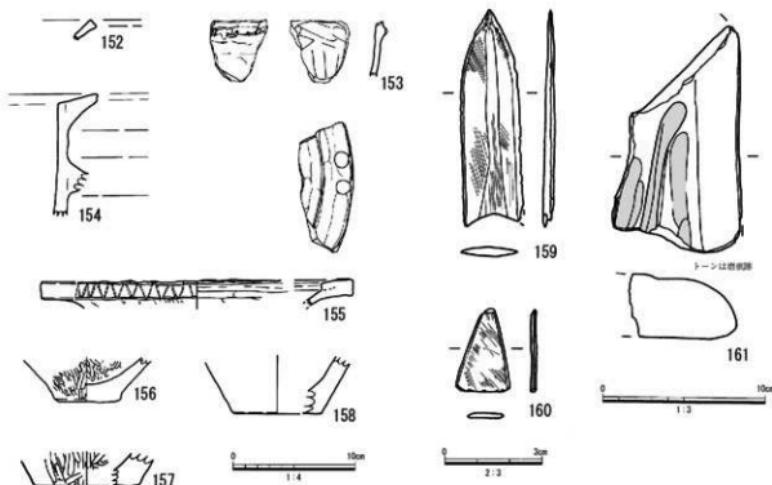
### 1号遺物集中部 (S Z 1) (第25図)

A5-2区において、破碎した平底の壺151の下半部等が長軸約1.0m、短軸約0.5mの範囲で出土した。第IV層掘削中に出土した片は水平の状態であったことから、本来は何らかの遺構の底面に据えられた壺151が破碎したとものと考えられる。その他に3条の突帯をもつ壺の肩部150が出土した。

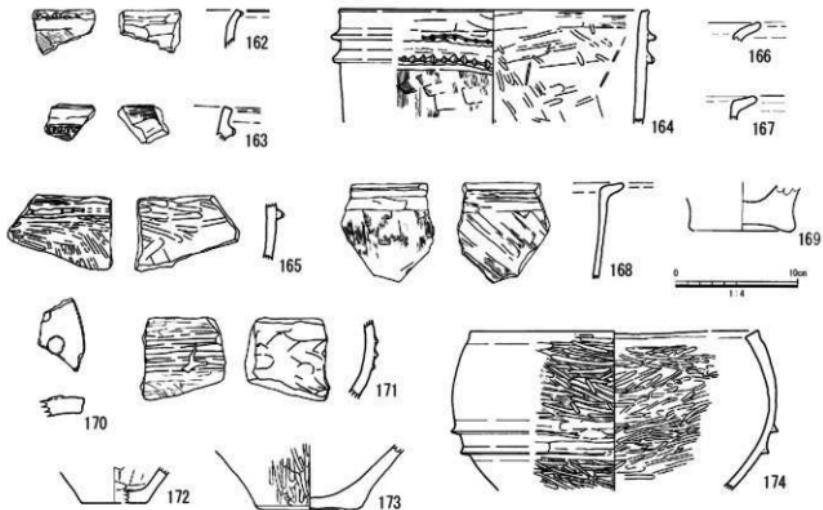
## 6 遺構に伴わない遺物 (第26・27図)

A区・B区から出土した弥生時代中期に帰属する遺構に伴わない遺物を掲載しているが、ここでは特徴的なものだけを述べる。

153は口縁部がやや内湾する下城式系壺で、やや小型になるものか。154は山ノ口式系壺で、色調は暗褐色を呈し胎土に雲母を含む。155は下城式系の広口壺で、水平になる口縁部上面に2個を単位とする円形浮文をもつ。また、面をなす口縁端部には鋸歯状の沈線を施す。159は長さ6.55cmになる大型の磨製石鏃で、160は未製品か。161は砥石で片面のみ利用されている。162は下城式壺で、外傾する口縁端部に刻目をもつ。165は壺としたが、やや内湾する胴部形態から壺の可能性もある。168は短く明瞭に屈曲する口縁部をもつ壺で、張りのない器壁の薄い胴部をもつ。170は広口壺の口縁部で、上面に円形の浮文をもつ。174は碗状になる豊後系の台付き鉢で、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。



第26図 A区出土の弥生土器及び石器類



第27図 B区出土の弥生土器

## 第Ⅳ章 まとめ

### 第1節 後期旧石器時代の様相

後期旧石器時代に帰属する遺構については、調査方法の影響により第V層に包含されていた散疊群を抽出できなかったが、当該期の疊群が存在した可能性を完全に否定することはできない。また、調査区を南東に向かってわずかに傾斜している旧地形と遺物の出土地点を踏まえると、B区を中心に後期旧石器時代の活動の跡が残る可能性があったが、今回の調査では捉えることができなかった。後平田遺跡や東九州道関連調査の成果から、町域における後期旧石器時代の人類の活動は既知のことであり、活動の場である台地が卓越する場所が周辺に多いことから、今後も遺跡の保護に留意する必要がある。

(徳田・徳原)

### 第2節 繩文時代の様相

縩文時代に関しては、二次堆積アカホヤ層下位にあたる第IV層で検出された集石遺構、第V層面で検出された炉穴、土坑と、それらに伴うであろう第IV層出土の土器、石器などによって構成される遺構・遺物で特徴付けられる。調査時においては当該期が主たる対象期と認識されており、実際に集石遺構の検出と実測に多くの時間を要した。

土器からみたその時期は、早期前葉の後半から中葉にかけてであり、土器編年上は加栗山式から別府原式、押型文系にかけての型式に位置づけられる。特に別府原式の出土数が最も多く、当該型式の示準期が縩文時代における遺跡形成のピークと捉えられる。

石器に関しては、別府原式土器の標識遺跡でもあり、同型式の単純遺跡である別府原遺跡の石器群と比較して、出土数量は少ないもののほぼ同様の構成と捉えることができる。116は石錘で厚さからみて十分な薄さが得られない製作途上のものと考えられる。119の石錘は疊の短軸側に打ち欠きによる抉りを入れている。165の打製石斧は欠損品を再加工したものと考えられる。側縁に抉りを入れており、片面に自然面を残す。

(徳田・吉本)

### 第3節 弥生時代の様相

弥生時代の遺構としては、中期後半期～後期初頭に帰属する堅穴建物3軒、堅穴建物の可能性がある土坑1基、溝状遺構1条などを検出した。町域では東九州道調査の成果により、尾花A遺跡などの弥生時代中期における拠点的な集落は、やや内陸部（山麓から派生した台地上）に展開することが知られていた。しかし、今回の調査でより海に近い台地の縁辺においても、同時期の集落が営まれていたことが判明したこと、町域の弥生時代を考える上で非常に重要な成果となった。しかも特筆すべきは、町域外ではあるが高鍋町持田中尾遺跡（前期末～中期初頭）や新富町鎧遺跡（中期前半期）のような台地縁辺に派生する舌状台地に営まれた環濠をもつ集落と同様に、当該集落もこれを囲う環濠を有していたことが確認できた。そして、内陸部の弥生時代遺跡群とは違い、前述の環濠集落については後期以降に発展していくことが特徴としてあげられ、井手ノ上遺跡においても同様の現象が確認できた。このことは、県内における弥生時代の環濠集落のあり方を検討する上で重要な課題のひとつであると考える。

(徳田・二宮)

第2表 井手ノ上村遺跡出土の石器類計測表

器物番号	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石種	備考
1	角状石器	A-3.3	4.76	1.30	1.00	4.9	頁岩	
2	礫状石器	B-4.2	3.80	5.95	4.00	91.6	頁岩	
3	作業用尖頭石器	B-3.3	2.23	2.80	1.07	8.2	頁岩	
4	石器	B-3.2	4.25	2.70	2.45	27.9	頁岩	
112	打削石器	A-5.1	1.56	1.60	0.40	0.9	チート	
113	打削石器	B-4.2	2.80	1.80	0.27	1.2	頁岩	
114	打削石器	B-2.1	2.15	1.40	0.28	0.6	チート	
115	打削石器	A-3.1	1.90	1.30	0.30	0.4	チート	
116	打削石器	A-6.2	2.44	2.36	0.67	4.3	チート	
117	石器	B-2.1	1.00	1.00	0.28	0.2	頁岩	
118	擦磨石器	A-1.1	2.30	1.70	0.85	2.6	頁岩	
119	サイドスリッパー	B-2.2	8.20	5.15	1.30	62.1	ホンシフカルク	
120	サイドスリッパー	A-5.1	10.00	7.30	2.82	202.5	ホンシフカルク	砂質

第3表 井手ノ上村遺跡出土の土器類計測表①

器物番号	器種	出土位置	手平・溝溝・支輪付			色調	地土の特徴	備考	
			内面	外面	内面				
5	深鉢	C-3.2	楕円形片状	側面平行付 斜面平行付	楕円形片状 斜面平行付	褐色 SRY 4.2	灰褐色 TSYR 5.4	1cm以下の黒、白、黄土、半透明の粒を含む	
6	深鉢	C-3.2	斜面平行付の直腹式 (黒帯)	斜面平行付の直腹式	ナダ	灰褐色 SYR 5.4	灰褐色 SYR 6.2	1cm以下の黒、白透明、灰、黄土の粒を含む	
7	深鉢	B-3.2	斜面平行の直腹式	斜面平行の直腹式	ナダ	灰褐色 TSYR 7.4	褐色 TSYR 7.6	1cm以下の黒、黄土、半透明の粒を含む	
8	深鉢	B-3.2	斜面平行の直腹式の直腹突起	斜面平行の直腹突起	ナダ	灰褐色 TSYR 7.3	灰褐色 TSYR 6.4	1~3mmの黒土、半透明の粒を多く含む	
9	深鉢	B-3.4	斜面平行の直腹の直腹 (直腹突起) (黒帯)	斜面平行の直腹 (直腹突起)	ナダ	灰褐色 TSYR 7.4	灰褐色 TSYR 7.4	1cm以下の黒、白、黄土、半透明の粒を含む	
10	深鉢	B-3.2	直腹突起	直腹突起	ナダ	灰褐色 TSYR 7.3	灰褐色 TSYR 6.4	1~3mmの黒、白透明の粒を含む	
11	深鉢	B-3.2	ナダ形状からの直腹突起	ナダ	褐色 SYR 6.6	褐色 SYR 6.6	1cm以下の黒、黄土、半透明の粒を多く含む		
12	深鉢	B-3.2	直腹の直腹の直腹 (直腹突起)	直腹の直腹の直腹 (直腹突起)	窓ナダ	灰褐色 TSYR 6.4	灰褐色 TSYR 6.4	1~3mmの黒、白、黄土、半透明の粒を含む	
13	深鉢	B-3.2	直腹の直腹突起	直腹の直腹突起	ナダ	褐色 SYR 6.6	褐色 SYR 6.4	1cm以上の黒、白、半透明の粒を多く含む	
14	深鉢	B-3.2	窓ナダの直腹	窓ナダの直腹	ナダ	灰褐色 TSYR 6.4	灰褐色 TSYR 5.4	1~3mmの黒土、灰、白、半透明の粒を含む	
15	深鉢	B-3.2~B-2.2	側面平行直腹無	側面平行のナダ	褐色 SYR 7.6	褐色 SYR 7.6	1~3mmの黒土の粒を含む		
16	深鉢	B-3.2	側面平行の直腹	側面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 7.4	1~3mmの黒土、真紅、半透明の粒を含む		
17	深鉢	A-2.2	側面平行の直腹	側面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1cm以下の黒、白透明の粒を含む		
18	深鉢	A-2.2	直腹	直腹	ナダ	灰褐色 TSYR 7.4	灰褐色 TSYR 7.4	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む	
19	深鉢	L-3.0~B-3.2	斜面平行の直腹	斜面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 8.2	1cm以上の黒、白、半透明の粒を多く含む		
20	深鉢	L-3.0~B-3.2	斜面平行の直腹 (黒帯)	斜面平行のナダ	褐色 SYR 7.6	褐色 SYR 7.4	1~3mmの黒土の粒を含む		
21	深鉢	L-3.0~B-2.2	斜面平行の直腹	斜面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1cm以下の黒、白透明の粒を含む		
22	深鉢	L-3.0~B-2.2	斜面平行の直腹 (黒帯)	斜面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1cm以下の黒、白透明の粒を含む	外側：黒付着	
23	深鉢	B-3.2~B-3.1	斜面平行の直腹	斜面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.4	1~3mmの黒、白透明の粒を含む		
24	深鉢	L-3.0~B-3.2	直腹	直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む	
25	深鉢	L-3.0~B-3.2	斜面平行の直腹	ナダ (黒帯)	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白透明の粒を含む		
26	深鉢	B-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白透明の粒を含む		
27	深鉢	L-3.0~B-3.2	斜面平行のナダ	斜面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
28	深鉢	L-3.0~B-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む	外側：黒付着	
29	深鉢	L-3.0~B-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白透明の粒を含む		
30	深鉢	L-3.0~B-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1cm以下の黒、白透明の粒を含む		
31	深鉢	B-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
32	深鉢	B-3.2	斜面平行の直腹 (黒帯)	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
33	深鉢	B-3.2	斜面平行の直腹	丁寧なナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 7.4	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
34	深鉢	A-1.9C1	斜面平行の直腹	斜面平行のナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を多く含む		
35	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	不明	褐色 SYR 7.4	褐色 SYR 7.4	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
36	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ (黒帯)	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
37	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1cm以下の黒、白、半透明の粒を含む		
38	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹 (黒帯)	ナダ	褐色 SYR 7.3	褐色 SYR 7.3	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
39	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	丁寧なナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 7.6	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
40	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 7.3	褐色 SYR 7.6	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
41	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 7.3	褐色 SYR 7.6	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
42	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 7.3	褐色 SYR 6.4	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
43	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	斜面平行の直腹	褐色 SYR 5.6	褐色 SYR 5.6	1cm以下の黒、白を含む		
44	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹 (直腹)	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
45	深鉢	A-3.2	浅い直腹?	丁寧なナダ (直腹)	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
46	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ?	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
47	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ?	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
48	深鉢	A-1.9L	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 6.2	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
49	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹 (直腹)	丁寧なナダ (直腹)	褐色 SYR 6.2	褐色 SYR 5.5	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		
50	深鉢	A-3.2	斜面平行の直腹	ナダ	褐色 SYR 5.5	褐色 SYR 5.5	1~3mmの黒、白、半透明の粒を含む		

第4表 井手ノ上村遺跡出土の土器類計測表②

器内 番号	器種	面状	出土 地点	子・裏窓・支窓はか		色調	胎土の特徴	備考
				外側	内側			
51	漆器	瓶	A-3-1	貝多窓	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5YR6-4	2~3mmの灰、白、白の粒を含む 1mm以下の黄緑、灰、半透明の粒を含む
52	漆器	瓶	A-4-1	押脛式	ナデ(黒窓)	伝5M-傳7YR6-6	伝5YR6-4	1~2mmの白、灰、黄土、黑色の粒を多く含む
53	漆器	瓶	A-2-1	鷹嘴鋸刃式	ナデ	傳5YR6-6	傳5YR6-6	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
54	漆器	瓶	A-5-1	押脛式	鷹嘴鋸刃のナデ	傳2YR6-6	伝5YR6-4	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
55	漆器	瓶	A-4-3	山型鋸刃式	山型鋸刃の横のナデ	伝5M-傳7YR5-5/4	伝5M-傳7YR5/4	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
56	漆器	瓶	A-2-2	山型鋸刃式の横ナデ?	山型鋸刃の横ナデ?	伝5M-傳7YR5/4	伝5M-傳7YR6-4	1~2mmの白、白、黄色の粒を含む
57	漆器	瓶	A-6-1	筒内向の把柄式	丁寧なナデ?	伝5M-傳7YR5-5	伝5M-傳7YR5-4	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
58	漆器	瓶	A-2-2	ナデ	ナデ(黒窓)	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-4	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
59	漆器	瓶	A-2-2	ナデ・押脛式?	ナデ	伝5M-傳7YR6-3	伝5M-傳7YR7-7/4	1~2mmの白・粒を含む
60	漆器	瓶	A-3-2	ナデ	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR6-4	1~2mmの白、灰、兩色の粒を含む
61	漆器	瓶	A-3-2	ナデ	ナデ(黒窓)	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR6-3	2~4mmの黄土、灰、白、灰色の粒を含む
62	漆器	瓶	A-4-2	ナデ・山型鋸刃式	ナデ	伝5M-傳7YR7-4	伝5M-傳7YR6-4	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
63	漆器	口桶形	B-2-2	楕円方向の3条の目柄研究 楕円方向の内窓研究	-	伝5M-傳7YR5-4	伝5M-傳7YR6-4	1mmの粒、白、白、半透明の粒を含む
64	漆器	口桶形	B-2-2	楕円方向の3条の目柄研究 楕円方向式	楕円方向のナデ	傳5YR6-6	傳5YR6-6	1~2mmの黄土、灰、半透明の粒を含む
65	漆器	口桶形	B-4-2	前向の目柄研究 前向の目柄研究と内窓研究	ナデ	伝5M-傳7YR5-3	伝5M-傳7YR5-3	1~2mmの黄土、白、半透明の粒を含む
66	漆器	瓶	B-4-2	前向の目柄研究、鋸刃 鋸刃方向の内窓研究	鋸刃方向のナデ	伝5M-傳7YR4-2	伝5M-傳7YR5-3	1~2mmの黄土、白、半透明の粒を含む
67	漆器	瓶	B-1-2	前向の目柄研究の残 鋸刃方向の内窓研究	鋸刃方向のナデ	伝5M-傳7YR5-3/2	傳5YR6-6	1mmの黄土、白、半透明の粒を含む
68	漆器	瓶	B-2-2	前向の目柄研究の残 鋸刃方向の内窓研究	ナデ	傳5YR6-6	黑斑10YR2-2	1~2mmの白、白、半透明の粒を含む
69	漆器	瓶	B-2-2	前向の目柄研究の残 鋸刃方向の内窓研究	鋸刃方向のナデ	傳5YR6-6	伝5M-傳7YR5-3	1mmの粒、白、半透明の粒を含む
70	漆器	瓶	B-2-1	前向の目柄研究 鋸刃方向の内窓研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	傳2YR6-6	1~2mmの灰、白、半透明の粒を含む
71	漆器	瓶	B-2-2	前向の目柄研究の残 鋸刃方向の内窓研究	鋸刃方向のナデ	明赤斑5YR5-6	伝5M-傳7YR5-3/2	1mmの白、灰、半透明の粒を含む
72	漆器	瓶	B-2-2	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	傳5YR6-6	1~2mmの灰、白、半透明の粒を含む
73	漆器	瓶	B-2-2	前向の目柄研究の残 鋸刃方向の内窓研究	鋸刃方向のナデ	伝5M-傳7YR5-3/4	伝5M-傳7YR5-3/2	1mmの白、白、半透明の粒を含む
74	漆器	口桶形・鉢形	B-S2	前向の目柄研究 前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-3/2	傳5YR6-6	1~2mmの白、灰、白、半透明の粒を含む
75	漆器	口桶形	B-2-2	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR6-4	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
76	漆器	口桶形	B-2-2	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR5-3/2	伝5M-傳7YR5-3/2	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
77	漆器	口桶形	B-3-3	前向の目柄研究	前向の目柄のナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-2	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
78	漆器	口桶形	B-2-2	前向の目柄研究	前向の目柄のナデ	傳5YR6-6	傳5YR6-6	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
79	漆器	口桶形	B-2-2	ナデ・鋸刃方向の内窓研究	鋸刃方向のナデ	傳5YR7-7/6	傳5M-傳7YR5-1	1~2mmの黄土、白、半透明の粒を含む
80	漆器	口桶形	A-S1	前向の目柄研究	前向の目柄のナデ	伝5M-傳7YR6-3	伝5M-傳7YR6-3	1~2mmの白、灰、白、半透明の粒を含む
81	漆器	口桶形	A-1	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR7-3	浅黄斑7YR5-4	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
82	漆器	口桶形	B-2-2	黒斑のための目柄研究	ナデ?	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR6-3	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
83	漆器	口桶形	A-S2	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-2	1mmの白、白、半透明の粒を含む
84	漆器	口桶形	B-2-2	前向の目柄研究 前向の目柄研究	鋸刃方向のナデ?	明赤斑7YR5-4	伝5M-傳7YR5-2	1~2mmの黄土、白、半透明の粒を含む
85	漆器	瓶	B-1-2	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-4	1~2mmの白、灰、白、半透明の粒を含む
86	漆器	瓶	B-2-2	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR6-4	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
87	漆器	瓶	B-3-1	前向の目柄研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR6-3	1mmの白、白、半透明の粒を含む
88	漆器	瓶	B-2-2	鋸刃方向の内窓研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-4	1~2mmの白、半透明の粒を含む
89	漆器	瓶	B-3-2	鋸刃方向の内窓研究	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-4	1~2mmの白、半透明の粒を含む
90	漆器	瓶	B-2-2	鋸刃方向の内窓研究?	ナデ?	傳5YR7-7	伝5M-傳7YR6-3	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
91	漆器	瓶	B-2-2	鋸刃方向の内窓研究?	鋸刃方向のナデ?	伝5M-傳7YR6-4	傳5M-傳7YR7-2	1mmの白、白、半透明の粒を含む
92	漆器	瓶	A-S2	前向の目柄研究	ナデ(黒窓)	伝5M-傳7YR6-3	伝5M-傳7YR6-3	1mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
93	漆器	瓶	A-S2	前向の目柄研究	鋸刃方向のナデ?	伝5M-傳7YR6-3	浅黄斑7YR5-4	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
94	漆器	瓶	B-1-4	前向の目柄研究の残 鋸刃方向の内窓研究	ナデ	傳5YR6-6	傳5YR6-6	1~2mmの白、灰、半透明の粒を含む
95	漆器	瓶	A-S2B	後方の目柄研究	鋸刃方向のナデ?	浅黄斑10YR7-8	白底10YR7-8	1~2mmの白、白、半透明の粒を含む
96	漆器	瓶	B-2-2	後方の目柄研究	ナデ?	伝5M-傳7YR6-4	傳5YR6-6	1~2mmの白、半透明の粒を含む
97	漆器	瓶	B-2-2	後方の目柄研究	ナデ?	伝5M-傳7YR6-4	傳5YR6-6	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
98	漆器	瓶	A-S3	鷹嘴鋸刃式	ナデ	伝5M-傳7YR6-4	傳5YR6-6	2~4mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
99	漆器	口桶形	B-S2	ナデ	鷹嘴鋸刃のナデ?	明赤斑5YR5-5	傳5M-傳7YR5-5	1mmの白、白、半透明の粒を含む
100	漆器	口桶形	B-2-2	鷹嘴鋸刃のナデ(一部破壊)	鷹嘴鋸刃のナデ?	伝5M-傳7YR5-5/4	明赤斑5YR5-5	1mmの白、白、半透明の粒を含む
101	漆器	瓶	A-SP1	ナデ?	ナデ?	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-3	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
102	漆器	瓶	B-2-2	鷹嘴鋸刃のナデ?	ナデ?	傳5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-2	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
103	漆器	瓶	A-S2	ナデ?	ナデ?	伝5M-傳7YR6-4	伝5M-傳7YR7-2	-
104	漆器	瓶	B-2-2	ナデ?	ナデ?	伝5M-傳7YR6-4	傳5YR6-6	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
105	漆器	瓶	B-2-2	ナデ?	ナデ	明赤斑5YR5-5	傳5YR6-6	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
106	漆器	瓶	A-4-3	ナデ	ナデ	伝5M-傳7YR7-4	伝5M-傳7YR5-3	1mmの白、白、半透明の粒を含む
107	漆器	瓶	B-1-4	野脛式?	ナデ	伝5M-傳7YR7-4	傳5YR6-6	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
108	漆器	瓶	B-2-2	ナデ(部分的に剥離?)	ナデ	浅黄斑2.5T-7.2	浅黄斑10YR7-4	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
109	漆器	瓶	A-S2S	山型鋸刃式	工ナデ	明赤斑5YR5-5	明赤斑5YR5-5	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
110	漆器	瓶	A-S2	三つの内窓研究	工ナデ	浅黄斑2.5T-7.2	浅黄斑10YR7-4	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
111	漆器	瓶	A-S2S	漆器類目(ナデ?)	ナデ	明赤斑5YR5-5	明赤斑5YR5-5	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
112	漆器	瓶	A-S2	漆器類目(ナデ?)	ナデ	伝5M-傳7YR6-6	浅黄斑10YR7-3	1~2mmの白、黄土、白、半透明の粒を含む
113	漆器	瓶	A-S2S	漆器類目(ナデ?)	ナデ	伝5M-傳7YR6-6	浅黄斑10YR7-3	-
114	漆器	瓶	A-S2S	漆器類目(ナデ?)	ナデ	伝5M-傳7YR6-5	伝5M-傳7YR6-5	外観・漆付材

第5表 井手ノ上村遺跡出土の土器類類別測定表③

番号	器種	状況	出土 地點	手平・調整・文様は		色調	胎土の性質	備考
				内面	外面			
130 黒 口縁部 A : SA3	横方向ナメ	横方向ナメ	内面	浅黄褐色 10YR 8/3	浅黄褐色 10YR 8/2	-	-	外側：褐付着
136 白 L100-前・側部 A : SA3	前方のナメ	ナメ（側面板あり）	内面	浅黄褐色 7.5YR 8/4 に白い帯 5YR 7/4	浅黄褐色 7.5YR 8/4 に白い帯 5YR 7/4	0~3mmの白い粒を含む 1~3mmの白、青、白、半透明の粒を含む	-	-
135 白 前部 A : SA3	ナメ	横方向のナメ 横方向滑走	内面	灰白色 10YR 7/3	灰白色 10YR 6/2	1~3mmの黄土、灰、白、半透明の粒を多く含む	-	-
136 白 前部 A : SA3	壁の内側	ナメ	内面	灰白色 N 3/ 灰褐色 2.5Y 7/2	淡黄色 2.5Y 8/3	-	-	-
139 黒 口縁部・側部 B : SC2	斜方向滑走 異なる方向のナメ 斜方向滑走の口縁部ナメ	ナメ	内面	灰白色 10YR 7/3	灰白色 10YR 7/3	2~4mmの白、白、半透明の粒を含む	-	外側：褐付着
140 黒 L100-前・側部 B : SC2	2つの斜方向滑走	ナメ	内面	暗灰色 3YR 6/6	暗灰色 3YR 7/6	1~4mmの白、白、青、半透明の粒を含む	141と同一	外側：褐付着
141 黒 前部 B : SC2	前方のナメ	ナメ	内面	暗灰色 3YR 7/6	暗灰色 3YR 7/4	1~3mmの半透明の粒を含む	-	外側：褐付着
142 白 前部・側部 B : SC2	前方のナメ/口縁部ナメ (斜面板あり)	ナメ	内面	暗灰色 3YR 5/3 暗灰色 3YR 6/6	暗灰色 3YR 5/3 暗灰色 3YR 6/6	3~20mmの黄白色の粒を含む 1~3mmの白、灰、灰、半透明の粒を含む	-	-
143 白 前部 B : SC2	ナメ	ナメ	内面	暗灰色 3YR 7/6	暗灰色 3YR 7/6	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
145 白 前部 B : SC2	ナメ (工具痕あり)	ナメ	内面	暗灰色 3YR 7/6	暗灰色 3YR 7/6	1~3mmの白、白、半透明の粒を多く含む	-	-
146 白 前部 B : SC2	ナメ	ナメ	内面	灰白色 2.5Y 8/3	灰白色 2.5Y 8/3	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
147 白 前部 B : SC2	前方のナメ/口縁部 (斜面板あり)	ナメ	内面	暗灰色 3YR 5/6	暗灰色 3YR 5/6	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
148 白 前部 B : SC2	2つの斜方向滑走	ナメ	内面	暗灰色 3YR 7/4 暗灰色 3YR 6/6	暗灰色 3YR 8/4	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
149 白 前部 B : SC2	ナメ	ナメ	内面	灰白色 2.5Y 8/3	灰白色 2.5Y 8/3	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
150 白 前部 A : SZ1	壁ナメなし？(薄手) 斜方向滑走	壁方向のナメ (薄手)	内面	浅黄褐色 10YR 7/2	深灰色 2.5Y 5/1	1~3mmの黄土、半透明の粒を含む	-	-
151 白 前部 A : SZ1	ナメなし：ギザ	ナメ残存のみ？(薄手)	内面	浅黄褐色 7.5YR 8/6 に白い帯 5YR 6/3	浅黄褐色 10YR 7/4 に白い帯 5YR 6/3	-	-	外側：褐付着 内側：瓦化物 付着
152 黒 口縁部 A : S2	前方のナメ	修復方向ナメ	内面	灰白色 10YR 7/2	灰白色 10YR 7/2	1mm以下の白、灰、灰、半透明の粒を多く含む	1mm以下の白、灰、灰、半透明の粒を多く含む	外側：褐付着
153 黒 前部 A : S2	横方向ナメ 點ぬき吹き	ナメ	内面	浅黄褐色 10YR 8/3	浅黄褐色 10YR 7/3	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
154 黒 口縁部 A : S2	横方向滑走	ナメ	内面	暗灰色 3YR 7/6	暗灰色 3YR 7/6	1~3mmの白、白、半透明の粒を多く含む	-	-
155 白 口縁部 A : S2	壁方向滑走 横方向のナメ	横方向のナメ	内面	暗灰色 3YR 7/6	暗灰色 3YR 7/6	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
156 白 前部 A : S2-1	前方のナメ/ギザ 黒斑	ナメ (黒斑)	内面	灰白色 2.5Y 7/4 灰黑色 2.5Y 7/1 (黒斑)	灰黑色 2.5Y 7/4 灰黑色 2.5Y 7/1 (黒斑)	0K N 4/ 1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
157 白 前部 A : S2-2	前方のナメ (黒斑) ナメなし	ナメ	内面	灰黑色 2.5Y 6/2 灰黑色 2.5Y 6/2	灰黑色 2.5Y 6/2	2~3mmの黄土、灰、白、灰褐色の粒を含む	-	-
158 白 前部 A : S2-2 (丁字ナメ) (ギザ)	ナメ	ナメ	内面	灰黑色 2.5Y 6/2 灰黑色 3YR 6/4	灰黑色 2.5Y 6/2 灰黑色 3YR 6/4	1~3mmの白、白の粒を含む	-	-
162 黒 口縁部 B : S2-2	壁方向のナメ (黒斑) (斜面板あり)	ナメ	内面	灰黑色 2.5Y 7/2	灰黑色 2.5Y 7/2	2~3mmの白、白、白、半透明の粒を含む	-	-
163 黒 口縁部 B : S2-2	横方向滑走	横方向ナメ	内面	灰白色 10YR 6/3	灰白色 10YR 7/3	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	外側：褐付着
164 黒 前部 B : S2-2	前方のナメ 斜方向滑走	ナメ	内面	灰白色 10YR 6/4	灰白色 10YR 6/4	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
165 黒 口縁部・側部 B : S2-2	前方のナメ/ハッパ 前方のナメ	内面	灰白色 10YR 6/4	灰白色 10YR 6/4	1~3mmの白、半透明の粒を含む	-	外側：褐付着	
166 黒 口縁部 B : S2-2	前方のナメ	横方向のナメ	内面	灰白色 10YR 6/4	灰白色 10YR 6/4	1~3mmの白、半透明の粒を含む	-	外側：褐付着
167 黒 口縁部 B : S2-2	横方向のナメ	横方向のナメ (黒斑)	内面	灰黑色 2.5Y 7/2	灰黑色 2.5Y 7/2	1~3mmの白、各色の粒を含む	-	外側：褐付着
168 黒 口縁部・側部 B : S2-2	前方のナメ/ナメ	前方のナメ (黒斑)	内面	灰黑色 2.5Y 3/2 灰黑色 2.5Y 3/2	灰黑色 2.5Y 3/2 灰黑色 2.5Y 3/2	1~3mmの白、灰、白、半透明の粒を含む	-	外側：褐付着
169 黒 前部 B : S2-2	ナメ	ナメ	内面	灰白色 10YR 6/3	灰黑色 2.5Y 6/2	1~3mmの白、灰、白、白、半透明の粒を含む	-	-
170 白 口縁部 B : S2-2	横方向のナメ	横方向のナメ	内面	灰白色 10YR 6/3	灰白色 10YR 7/3	1~3mmの白、白、灰、灰褐色の粒を含む	-	-
171 白 前部 B : S2-2	3つの斜方向滑走	工具によるナメ 横方向のナメ	内面	灰白色 10YR 6/3	灰白色 2.5Y 6/6	1~4mmの白、白、灰褐色の粒を含む 1mm以下の白、各色の粒を含む	-	-
172 白 前部 B : S2-2	丁字ナメ (黒斑)	ナメ	内面	灰黑色 2.5Y 7/2	灰黑色 2.5Y 7/3	1~3mmの白、白、各色の粒を含む	-	-
173 白 前部 B : S2-2	前方のナメ/ハッパ (黒斑) (ギザ)	削除した内部表面 (ギザ)	内面	灰白色 10YR 6/3	灰黑色 2.5Y 7/2	1~3mmの白、白、半透明の粒を含む	-	-
174 黒 L100-前・側部 B : S2-2	前方のナメ/ハッパ (黒斑) (ギザ)	ナメ後極へギザか?	内面	灰白色 10YR 6/4 に白い帯 5YR 6/6	灰黑色 2.5Y 6/4 に白い帯 5YR 6/6	3~3mmの白い粒を含む 1~3mmの白、白、白、半透明の粒を含む	-	-

## 参考文献

- 石川悦雄 1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描(Mk. II)」『宮崎考古』9 宮崎考古学会
- 後田卓遺跡調査団・川南町教育委員会 2002「後田卓遺跡(宮崎県川南町後田卓遺跡における旧石器時代の研究)」
- 金丸武司 2004「宮崎における绳文時代早期前半期の土器群－別府原式土器の設定－」『宮崎考古』19 宮崎考古学会
- 河野裕次 2013「南部九州における弥生時代中期土器様式圖の動態」『古文化談叢』69 九州古文化研究会
- 川南町教育委員会 1983「川南町の埋蔵文化財」(遺跡詳細分布調査報告書)
- 黒川忠広 2002「南九州貝殻文系土器1－鹿児島県－」南九州査文研究会
- 新富町教育委員会 1983「建設遺跡 植根遺跡」(新富町文化財調査報告書2)
- 高鍋町教育委員会 1982「持田中尾遺跡発掘調査概要報告書」
- 坪根伸也・佐藤良子 2010「第Ⅲ章第2節(3)弥生時代前期から中期の遺物」「下郡道路群」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 100 大分市教育委員会
- 官崎県教育委員会 1999「官崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書II(詳説編)」
- 官崎県埋蔵文化財センター 2002「別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第2遺跡」(官崎県埋文センター発掘調査報告書61)
- 官崎県埋蔵文化財センター 2011「毎花A遺跡II(弥生時代後半)」(官崎県埋文センター発掘調査報告書195)

図 版



調査地点から日向灘を望む（西から）中央下がA区



A区東半部 縄文時代早期の散疋検出状況（南から）



B区南半部 縄文時代早期の遺構検出状況（北から）



C区中央部 縄文時代早期の遺構検出状況（東から）



A区 10号集石遺構検出状況（北から）



A区 17号集石遺構検出状況（北から）



B区 11号(右)・12号(左)集石遺構検出状況（北西から）



A区 1号炉穴検出状況（西から）



A区 1号竪穴建物検出状況（南から）



A区 3号竪穴建物検出状況（南から）



A区 3号竪穴建物遺物検出状況（南東から）



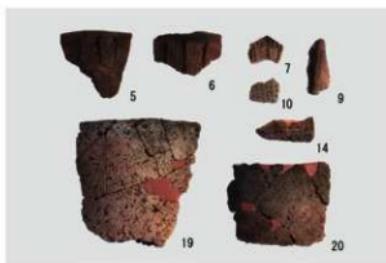
B区 2号土坑検出状況（北から）



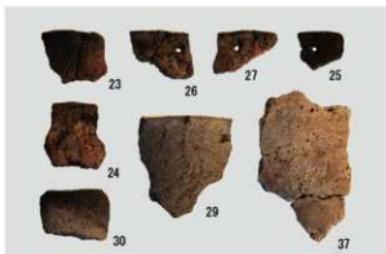
B区 1号溝状遺構検出状況（北西から）



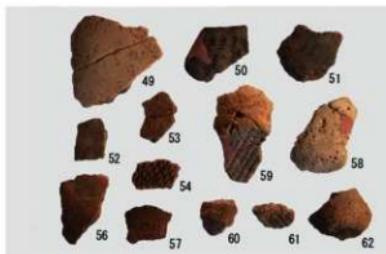
後期旧石器時代の石器類



A区出土 縄文時代早期の土器①



A区出土 縄文時代早期の土器②



A区出土 縄文時代早期の土器③



A・B区出土 縄文時代早期の土器①



A・B区出土 縄文時代早期の土器②



縄文時代早期の石器①



縄文時代早期の石器②

図版  
四



報告書抄録

川南町文化財調査報告 11

井手ノ上村遺跡

繁殖農場新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019年3月18日

発行 川南町教育委員会

〒889-1302 宮崎県児湯郡川南町大字平田 2386番地3

電話 0983(27)8020

印刷 有限会社アックプリント

〒889-1301 川南町大字川南 13886-5

電話 0983(27)6688